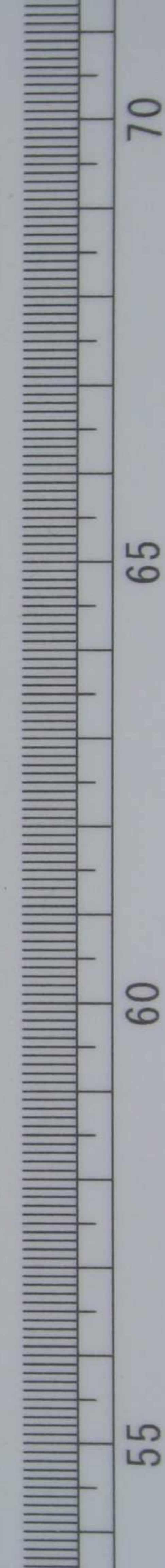
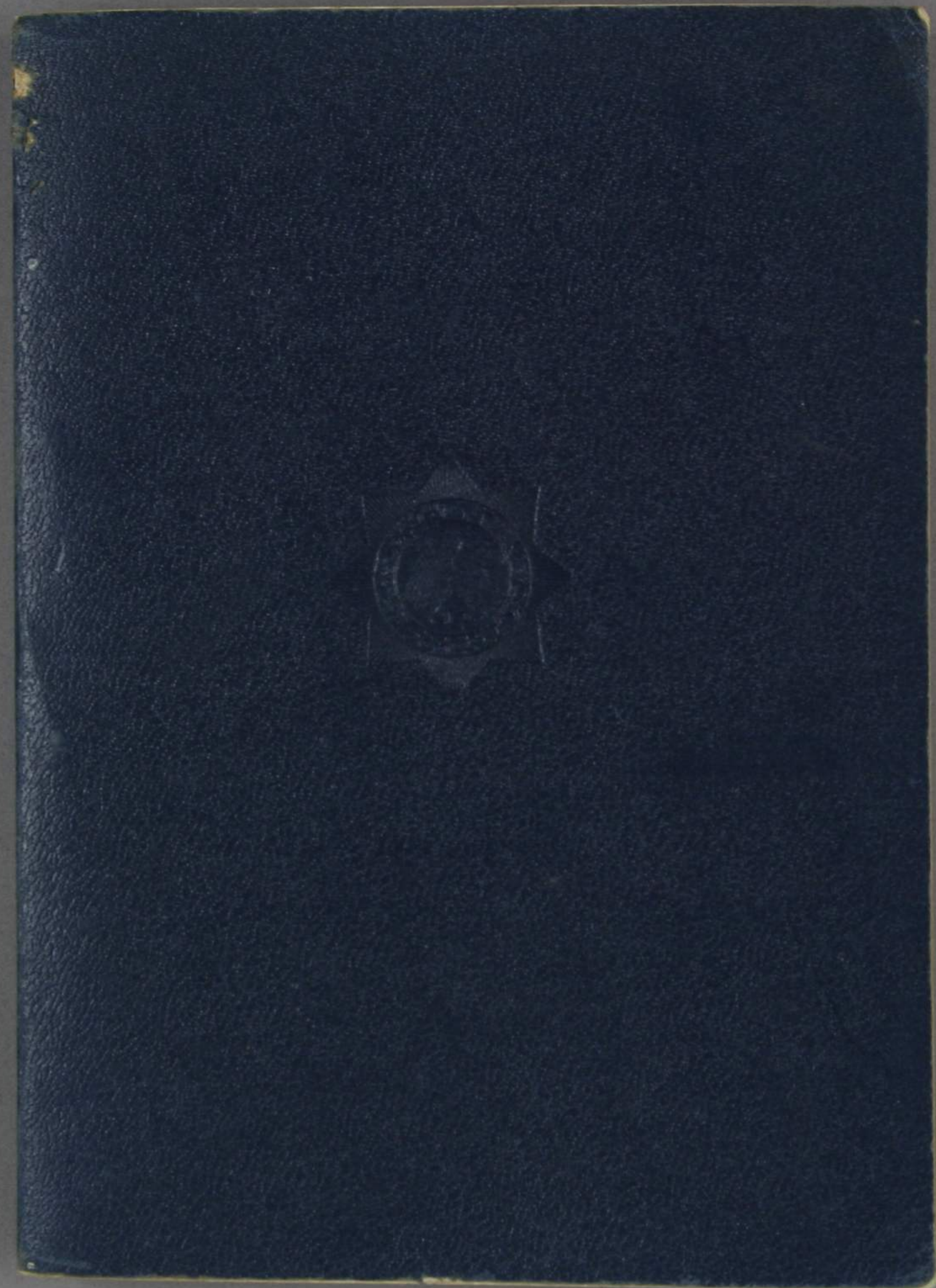
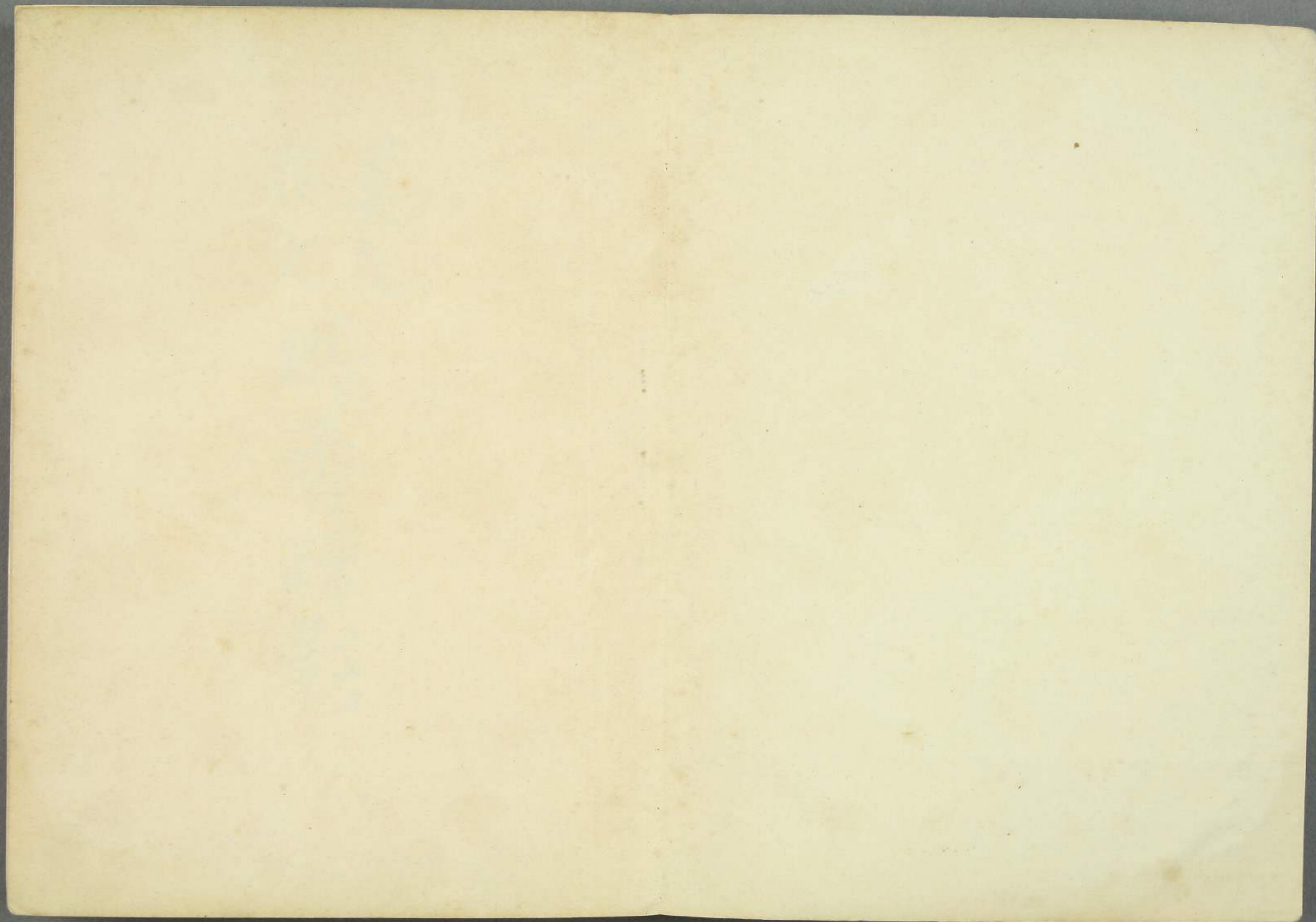


美文暗香疎影
韻文









美文
韻文

暗香疎影

はしがき

我れ、天地の間に、他に望みなし。唯我が心のゆく
にまかせて、詩文界の深山幽溪を跋渉するにあり。
我れ、浮世の朝夕に、他に樂みなし。唯我が情の動く
にまかせて、心に似ざる秃筆に、あら染めの淺き言
葉の色を染むるにあり。されば、錦にもあらず玉に
もあらず積年の文反故は、二つ三つの古葛籠に餘
り、心のすむ所を住家として、移り行く流浪の身の、
時にわづらひとなる事あれど、惜む物なき身の、こ
ればかりは棄てかねつゝ。

こたび、此三年ばかり庵を結びたる古雲州の山

も、我が心にまかせぬ事ありて、一日も我が住むべき所にあらず覺えて、俄に東都の故山に歸り來ぬ。故山なれどもとの住家の残れるにあらず。何にはあれ、母と妻との爲めに、雨露をしのぐ庵を構へざるべからず。されど、身にもてるは、例の古葛籠の文反故のみ。いかに餘るばかりありとて、文反故にては、方丈の庵とても、望みなきを、いかにせむ。

とさまかくさま思ひわづらへば、親しき桂月のその文反故の一部を、書やの主人に托して、一時の庵の代にもせよ、我が知れる書やの主人あり、たのみやるべしといふ。いと嬉れしくて、さらばとて、桂

月と博文館の主人とのなさけによりて、こゝに取りあつめて出だせるぞ、此の書なる。

題して、暗香疎影といふ。もと我が香もなき言の葉の花のみ。我が見る影もなき秃筆のあとのみ。春月おぼろなる窓前、浮動する芳香、人をして忽ち高士の訪へるかを疑はしむるの暗香あるにあらず。月色亦かをる林下、清麗たる嬌姿、忽ち人をして美人のたゞずむかを疑はしむる疎影のあるにあらず。暗香疎影の名、唯、暗といひ疎といふ字によりて撰びたるのみ。

されど、強ひて此の名にことつけたる我が思ひ

を云へば、此の暗香の名に随つて、此の書の、知らず
 く、満天下の高士の家に到らむことを望みたる
 のみ。此の疎影の名にひかれて、此の書の、知らず、
 満天下の美人の手に披かれむことを望みたるの
 み。あはれ、願くは、情ある天下の士よ、淑女よ、此の多
 情の詩奴をして、空しく落膽せしめたまはざらむ
 ことを。

駒込の草の庵にて

雨 江

美文韻
 暗香疎影目次

歸京の記	一
狂女	二〇
病床の吟	三一
夜半の梟	三九
草籠	四三
小田の里の一日	四五
山人の妻	五四
深山の美人	六六
道灌山の虫	一〇〇
瀧の川の紅葉	一一〇

山莊獨興……………一五

元旦即興……………一〇

寒山樵歌……………二三

つま琴……………二七

破れ琴……………三七

戀ひの山人……………四三

戀ひを……………四六

初春の聲……………四八

我が國家……………五二

天長節の日に……………六七

松と董……………七六

親友を哭す……………八三

加藤文學博士六十の賀に……………一八六

山上憶良……………一八九

深山の花……………二〇七

昔にて……………二二八

別後教へ子に與ふ……………二三一

大和撫子……………二四四

すみれ……………二八〇

さ夜時雨……………二八四

栗賣……………二八七



美文韻
暗香疎影

文學士 鹽井雨江 著

歸京の記

いかばかり浮世の嵐あらくとも

心の花は散らさじと思ふ

思ふ事ありて、一首を山窓の壁にとめて、二月の十一日、俄に都へ
歸へらむとて、簸の川の里を出で立つ。八雲の奥も、さすがに馴れ
／＼て、三年の月日を住み來つる里なれど、思ふ心の行くにまかせた
る身の、今は一日も片時も住み留まり難き心になりたればなり。

山陰冬深くして、春とはいへど、此の日ごろ、山河もわかずかき暮らしたる吹雪も、をりからをやみして、見送る野も山も、ま白にほひたる、いさぎよく思ひ立ちたる今日の我が旅路の心を語るに似て心地よく、さばかり四方をふたぎたる大空の雪雲も、さすがに今朝は途絶えしつ。さして行く都のあたりならむか、東の方の一すぢ縁にうち晴れて我れを迎ふる空も、いとうれしくのみぞ見わたさるる。

都は我が爲めの故山なり。思ふ人のありとなき身も、しかすがに戀しきならひの故山なり。ましてや、我れには去り難き同胞の泣きて残れるあり。隔てぬ心の友の契りて待つあり。何時何處都はつひに忘れぬ戀しき故山なり。此の三年、人やりならぬ山の假寐も、朝夕は都の空のながめつくされぬ。峯の白雲いとひてにはあらず、谷の夜嵐憂しとてにはあらず。唯、さしのぼる朝日に君を思ひいでむ傾く月に我れ

を忘るなどばかり契り來し人の、心にかゝりてなり。春は殊更あこがるる心のはてもなく、永き日の暮るるを知らにながめくらされぬ。東台の春に心のうかれ行きてにあらず。墨堤の花に心の残りてにあらず。唯、洛陽の故山共に看たる花に幾春、互みに色をも香をも語りあひたる人の戀しくてなり。秋は殊更身にしむ空の限りなく、永き夜の明るるを知らにながめあかさされぬ。品海の秋に心のうかれゆきてにあらず。墨水の月になごりのあるにあらず。唯、やどる袂はかはるとも互みにしぼる夜半の月かげな忘れそとしみし人の忘れねばなり。今や此のなつかしき都の空へ歸へらむとす。今や此の忘れぬ故山の人にあはむとす。思へば、楽しき今日の旅立ちなり、越え行く山河は遠くとも、わけ行く雲波は深くとも。思へば嬉れしき今日の旅路なり、馬蹄は深雪に迷ふとも、袖は嵐に氷るとも。しかも、其の懐しき都の

野山は、うれしき春の色に粧りて我れを迎へむとす。其の忘れぬ故山の人は、我が歸りつかむ日を指折り數へて待ちよろこぶときくを。心ははや其方の空へとびて、過ぎ行く山河も、しばしは夢のやうなり。身は既にあひたかりし故舊のあたゝかなる袖に抱かるゝ心地して、薄き旅衣を吹きとほす北山おろしも、しばしはよその寒さなりや。さはあれど、さは思へど、いかにせむ、また何時しか涙のはらくとこぼれ来て、とゞむれど、とゞめかねつ。やがて遇はむと待つ人の嬉れしきにはあらず。知らぬ別れも袖はしぼるなるよの常の別れの悲しきにもあらず。あはれ、我れは、思ひ立つ花の都の旅なれど、歸へらぬ父のあるが、悲しきなり。未だ咲かぬ庭の撫子を残しおきて思ひがけなき今日の別れの悲しきなり。さはいへ、生ひさきこもる庭の撫子は、我が教への露は無くとも、花は咲きなむ。行末遠からむ我が教

へ子は、一度は八雲の外に行き別るとも、また何時しかめぐりあふ時もありなむ。其の悲しみは、さても思ひ慰むべし。唯、我が父は、我が父は、今日共に歸へらざる我が父は、何時を待ちてかまた逢ふべき。何處を求めてかまた見るべき。此の世にはまた逢ふ時も見る方も無きこそ、悲しけれ。

去らぬ別れは、もとよりまぬかれぬも、思ひきや、假りそめの山住みにして、父君が永き世の別れにあひ奉らむとは。一昨年春、桂月の此の地に招かれたるを、よきたよりにて、君を母上と共に、白雲かゝるわびしき山陰の庵に迎へ奉りしも、短き假寐の間も共に住まほしく思ひてなりけるを。今や永く都の故山に歸へり住まむとするに、悲しいかな、共に歸へり給ふ父君はおはさぬなり。一昨年春は、いと健やかにおはして、談笑の聲もいと楽しげに入りたまひたる山路を、

今日は、空しき白骨を、力なく我が手に抱かれて出でたまふ。知らず、精霊、いかならむ今日の思ひ。知らず、山河、いかならむ今日の情。精霊きこえず、山河語らず、唯、白骨の袖にむせぶ悲風の、此の兒の恨みを添ふるのみ。あはれ、君が一昨年の春、疾く歸へりまたやながめむ櫻花しはしばかりし旅ねとを知れとちぎりて出でられし都の花は、げに、君が一年ばかりの此の山住み、朝な夕なにしたはれし都の花は、やがて、我れ等が歸へらむ頃を待ちて、間もなく咲かむとす。さるに、共に歸へる母はおはせと、妻はあれど、父君は獨り此の山の假りねの露と消えて歸へられず。今や、萬里の春風、我れは空しく君が白骨を載せて、此のしたはれし花の都に向ふ。思ひ至れば、涙ははふり落ちて、とゞむれどとゞめかねたる恨みを。をりから、空は再びかきくもりて、一しきり吹き迷ふ吹雪に、來し方はあどなく埋れつ。行

くてもさながらおぼろなり。車上の袖にふりつもる雪をうちはらひつゝ、母上の御車、妻の車を見かへれば、をりから、力なげに翅ならべて、雁がねの、數さへ三羽のなつかしく、北をさしてぞ鳴き行く。汝れ等も故郷へ歸へらぬ父やある、いとど心づくしのかけなりや。夢のやうにて過ぎ行く程に、車は庄原に着きぬ。此處より舟に乗りて、七里の湖上を松江へ渡らむとす。我が今日の門出を見送りたる人々も、途の此處彼處に、思ひくゝに、今はどの別れをといめて、こゝまで送り來たれるは、誰れ彼れいと僅なり。送りたる道の程の遠き近きを、人の心の深し浅しとはいふべからず。唯、門の松蔭にたゞみで見送りたるまでの人にも、思ふ心は、はるくゝと、都までも我が身にそへて慕ひ來たるもありぬべし。

芥川、小豆澤といふ二生、此處に待ち迎へつ。舟を共にして、松江ま

で送らる。思ふ事ありて、昨日、學校を退きたる教へ子なり。この三年、宿をさへ共にしたる教へ子恭平の兄なる安田繁造ぬしも、盡きぬなごりの袖を、なほせめて松江までもと、ふりはへて舟を全うせらる。

何處の山よりおろすともなく、をりく、吹雪の、舟をつゝむまでに志きれば、小さき舟の狭き室にうづくまりて、互みにあかぬ事など語り合ふ。辛うじて光りをとほすばかりなる窓より、此の三年のかりね、さすがに見馴れたる山々の、ちらく／＼と見えがくれするも、なか／＼に心づくしのながめなり。お客さま、茶をめせと入り來れる船童、年はなほ十とは數へざるべし。白き縹緞も洋袴も、めづらしき炭染めになりて、顔に手足に所々塗られたる石炭のあとは、そろはぬいろはに似たり。あはれ、親はあらむ、かなしき親はあらむ。日毎に通ふ教への

庭、顔にまで清書して歸へらむ隣りの子どもなど見む度毎には、其の悲しき親の心やいかならむ。さこそは人知らぬ袖の涙のたねならめ。子は無き身にも外ながら思ひくまるゝあはれやなど語らふ中に、此の頃の出で立ち騒ぎの疲れにや、うとく／＼とまどろまれつ。何時しか舟は松江に着きぬ。此處にも、人々の待ちつけて迎へらる。多くは、此の頃學校を去りたる友や教へ子なり。

湖上に面したる三代水亭にやどる。室は清く、眺めはよく、心も自から慰められつ。人々たえず訪ひ來て、酒のみかはし、思ふ事かたりあふに、旅寐の淋しさも、今日は覺えず。明日は堺より舟路にて敦賀へ渡らむと定めつ。母はかねても舟を嫌ひたまへり。されど、此の頃の吹雪に、何處も積雪深く、殊に山陰山陽の境界は一丈にもあまれりときく。陸路は所詮行くべくもあらじ。思へば、かゝる山路に思ひ入り

たる三年の昔の心さへ、今は恨めしくぞ思ひいでらるれど、かひなし。船のたよりなど、堺の港に問ひ合はするに、北海は一人の荒れなれば未だ入るべき汽船も入らず、出づる汽船もあらずといふ。いとおぼつかなくもどかしけれど、すべきやうなければ、心長閑にこの松江の宿に待つことと定めて、寝につく。空はまたもや暴れいでて、窓も破れど狂ふ雪あらし、床も動けと猛ける波の音、いとものすごくて、歸へる都の夢も、幾度か破れつ。辛うじて近づく故山、一向に路を急ぐ背後より、頻りに呼びとむる人ある心地して、目さむれば、宿の召仕の、客人のたづねて來たれりとして驚かすなり。夜半も既に過ぎたるを、いぶかしや、ともあれ此方へ案内せよとて、臥床を出でて待てば、思ひきやく、別れを惜しみたる教へ子の中に、殊に志ありけるが、餘りのなごりのをしさに怵へずして、せめて今一と目をとて、三十人

ばかりうちつれて、此處まで追ひ來たれるなりとは。此の暴れに暴れたる夜に、八里にあまる路を、よく／＼志のあればぞ。うれしどもうれし。人心朝に馴れ夕べに忘るゝを習ひの今の世に、さても、めでたくも根ざしたる庭の撫子よ。おひさきはさこそめでたき花ならめ。それをも見はてずして、心の行くにまかせたる今日の旅路、誰れかは涙なからむや。

一夜と思へることの假りねも、五日に成りぬ。待つなる汽船のたよりは無し。追ひ來たりし教へ子どもは、我が出雲の岸を離れたまはむまではとて、なほ留まりて歸へらず。親たちのさぞや心づかひしてあらむと思ひやれば、かくてあらむは、いと心なきに似たり。明日は兎に角に堺まで出でたくむと定めつ。あかね別れの形見にとて、をしき袖つらねたる姿を、一葉の紙に寫しとめなどして、其の日は暮らしつ。

何にまれ、我が教への形見をと、教へ子どもの乞ひ望むまゝ。

富士の根の高きを常の心にて

立てよ此の世に日本男子は

など、なほ我が心に思ひうかぶまゝを書きつけやる程に、其の夜も明けぬ。

正午頃、堺へと志して舟にのる。ありし教へ子、こと人も誰れ彼れ、岸に立ち並びて見送りせらる。其が中に錦織綱堂ぬしもおはしたり。思へば、三年の昔、我が簸の川の里に着きたる夜、はじめて我が旅舎を訪はれしは、此の綱堂ぬしなりき。かくて、此の八雲の奥の永き我が假りねの間、今日も忘れぬ樂みは、綱堂ぬしが小田の里の宿に暮らしたる一日なりき。志かも、今、我が雲州を去るに臨んで、年ごろ交りたる簸の川の里の人にして、此處に別れを送りたまへるは、唯この

綱堂兄の一人なり。あはれ、綱堂兄よ、我が雲州の史は、さながら君が知にはじまり、君の知に終る。此の始めを以て、此の終りを得たるの榮は、誠に故山へ歸へる我が今日の錦とこそ思へ。

舵は整ひぬ。纜は解かれぬ。舟はいよ／＼岸を離れむとす。さらば、此の三春さすがに馴れて見し古雲州のなつかしき山河も今や限りなる。さらば、此の三秋さすがに馴れて伴れたる假り寐の友も今や限りなると思ふに、今更のなごり何ににたとへむ。唯、涙のみ胸にあふれ來つ。岸の人々もさこそならめ。唯、互みに幸くてあれや健やかなれやと僅にとゞめなる一語、微かなれど、短かけれど、無限の情は、かゝる響にぞこもるなるべき。逝く水は心なくて、舟の去るにまかせ、舟は無情にして、いよ／＼遠く岸を離れ行く。見ゆる限りはと甲板の上に見かへりたるまゝ漕がれ行けば、いづくまで情けなくも我れをな

やまず吹雪ぞや。此處にもまた一としきりかきくらし來て、憎くや、岸をも人も包みて去りぬ。晴れ行くまゝに、今一と目をと、のびあかれば、彼方もなほ見えぬまでとや送るらむ、うす黒き影のあつまれるやうになりて、ほのかに見ゆ。さらば、我が人々よ、永く靜に暮らしてよ。さらば、雲州の山川よ、常しなへにのどかなれ。彼方の人々の黒き影は、次第にいよ／＼うすく消え行きつ。唯、見わたす山河の、空しくうなづくに似たるのみ。

船は暫時も留まらずして、つひに間もなく雲州の外に我れを送り去りつ。堺港頭の旅舎につきて宿る。十二人の教へ子は、なほ舟を共にして、此處までも追ひ來ぬ。あはれ、何らの悲しき子ぞ。何らの嬉れしき心ぞ。今日の我が境遇に於ては、誠に、彼の松浦瀉石になるまで立ちて別れを惜みたる佐用媛の百人に送られむよりも、吉野山の峰の

白雪紅涙に染めつくすまでに泣きて慕ひたる靜の千人に惜まれむよりも、此の十二人の別れぞ悲しき。この十二人の心ぞ嬉れしき。

安田 恭平	安井 幾太郎	園山 茂右衛門
永瀬 萬太郎	山崎 榮之助	高野 省三
岡崎 澄太郎	高木 八太郎	今岡 榮
芥川 誠之助	小豆澤 政太郎	松浦 精一

あまりの嬉しさに、殊更に其の名をこゝに記す。其の夜、蕎麥など調むて贈りやる。永く忘れざる我が心のしるしなり。

明くれば、教へ子どもも、さすがに今はとて別れ歸へりぬ。志したる汽船も未だたよりなし。何んとなう我が魂の我れに無き心地して、うつら／＼と夢のやうにて、一日は暮れぬ。次の日もまた。

十七日の夜半近きころ、やう／＼に汽船長門丸に乗りて堺を出で立

つ。雲州三年の新知は、昨日全く八雲の奥に別れ去りつ。さして行く都の故山に我れを待つらむ舊知は、なほ萬里雲波の末なり。渺々たる大海に馴れぬかりねの浪枕、淋しさいふばかりなし。疾くいねむと念ずれど、目は容易くは合はず。母上も妻も全じ心にや、共にいねかねたるけしきなり。何時しか絶えく結ぶ故山の夢に、断れくじまじりて見ゆる雲州のなごり、いとどあやしき夢路かな。うれしくものぼる故山の嶺、忽ち身は空にあげられて、千丈の谷に投げ込まるゝと見て驚けば、窓外は、あやめもわかぬ暗黒の雲に掩はれて、とろろく狂風怒濤の響は、さながら悪鬼羅刹の群をつくし來て、我が船を一揉みに揉み破らむどののしるときこえ、をりく聞にきらめく白波の影は、噛みならず牙とおぼえて、身の毛もよだつべし。我が借りたる一室は、船を好みたまはぬ母の爲めに動搖の少き所をとて擇びたるなり。され

ど、其處さへ、枕したる頭の、やゝもすれば離れむとす。半ばは生きたる心もなくて、一向に舟の進みを疾やかれと念じ行く程に、宮津あたりの沖ならむか、夜はほのくくとわけぬ。かねても見まほしく思ひつる天の橋立、よそに見ずしてすぎ行けど、をしき心も、今日はせず。松の心ありて聞かばと思ふに、いとをかし。何時しか海上いと靜になりたりと見れば、はやく敦賀の灣に入りたるなり。汽船はとまりぬ。舳は迎へぬ。初めて踏む北陸の岸、何んとなうめづらしくて見わたせば、をかしき形したる山も、おもしろき姿したるみ崎の松なども見ゆ。名を知らねば、興の少きぞ恨めしき。

萬年屋をたよりて憩ふ。さばかりいかにと氣づかひたる母上も、さして障りたまへるけしきなし。父上の守らせたまふにこそと思ふに、いとありがたし。氣比の神をも親しく伏し拜み、金が崎の城址に忠魂をも

どはまほしき心も出づれど、都へ疾くと思ふ心の、とかくにといめかねて、直ちに汽車に乗る。

十九日の朝、うら／＼どのぼる品川灣頭の朝日の影に、先づ心よく迎へられて、都に入れば、新橋には、はやく人々の待ちて迎へらる。皆、一昨年春、我が父母の出雲への門出を、此處に送りたまひし人どもなり。やがて疾く恙なくて歸へられむ日を待ちて迎へむとちぎりし人々なり。其の人々は變はらず、その所は變はらず。さるを、こゝに歸へりたまひたる父は、かはりにかはれる白骨の空しき姿なりとは。迎ふる人々の心も、さこそならめ。ましてや、母上よ。一昨年春は共に伴れ立ちて此處を出でたまひたるを、今や其の我が世の伴れに、永く別れ来て、此の變はらぬ都に、此の變はらぬ人々を見たまふ。げにいかなるみ心にかちはすらむと思ひ奉るに、いとかしこし。嗚呼、これ

誰が罪ならむ。誰が思ひ立ちたる假りねの罪ならむ。

うれしくも歸へる都の悲しきは

歸へらぬ父のあればなりけり

(明治三十四年三月作)



狂 女

(一)

あら、をかしやの 世の人や。

狂女と我れを 笑ふかや。

狂はぬ心の あればこそ、

忘れぬ戀路に 迷ふなれ。

笑はば笑へ、 知らぬ人は。

(二)

山よ、小山よ、 馴れの山、

汝れは知るらむ、 我が戀ひを。

亂れぬ心の 一すぢに

忘れぬ今日の 我が人の、

汝れは知るらむ、 行方をば。

(三)

かく踏みわけて、 幾春か、

汝れが霞の 奥にして、

よしや、此の山 裂けてもど、

ちぎりし人の 行方なり。

知らでや、山よ、 知らせてよ。

(四)

あな、つれなやな、 馴れの山、

そしらぬ顔を そむけつゝ、

笑ふに似たる 汝がさまは。

つれなや、山よ、 汝れもまた、
浮世の人に ならふかや。

(五)

松よ、を松よ、 馴れの松、
汝れは知るらむ、 我が戀ひを。
そめし心の 一つ色に

忘れぬ今日の 我が人の、
汝れは知るらむ、 行方をば。

(六)

かく立ち寄りて、 幾度か、
汝れが緑の 蔭にして、
二人りが中は 常はぞと

ちぎりし人の 行方なり。
知らでや、山よ、 知らせてよ。

(七)

あな、つれなやな、 馴れの松、
あらくも袖を うちふりて
よそくしげの ながさまは。
つれなや、松よ、 汝れもまた、
浮世の人に 習ふかや。

(八)

川よ、小川よ、 馴れの川、
汝れは知るらむ、 我が戀ひを。
もとの心の 一すぢに

忘れぬ今日の 我が人の、
汝れは知るらむ、行方をば。

(九)

かく行きかへり、幾秋か、
汝れが清けき 岸にして、
よしや、此の水 あせてもど
ちぎりし人の 行方なり。
知らでや、川よ、知らせてよ。

(十)

あな、つれなやな、馴れの川、
うきたる事と きこすてて
見むきもせざる 汝がさまは。

つれなや、川よ、汝れもまた、
浮世の人に ならふかや。

(十一)

岩よ、岩ねよ、馴れの岩、
汝れこそ、知らめ、我が戀ひを。
變はらぬ心の 一すぢに
忘れぬ今日の 我が人の、
汝れは知るらむ、行方をば。

(十二)

かくやすらひて、幾度か、
汝れが苔をば しとねにて、
二人りが中は 堅磐ぞと

ちぎりし人の 行方なり。
知らでや、岩よ、知らせてよ。

(十三)

あな、つれなやな、馴れの岩、
苔の志とねも かはらねば、
人のありかは 知るらむを。
つれなや、岩よ、汝れもまた、
浮世の人に ならふかや。

(十四)

忘れぬ昔の 色にいでて
咲くや古枝の 花や花、
汝れは教へよ、人の行方、

同く昔を 忘れざる
心の友と わを思ひて。

(十五)

世には語らぬ 汝れなれど、
我れには、花よ、語りてよ、
一言、人の 行方をば、
語る浮世に 人はなき
同じ伴れとし わを思ひて。

(十六)

あな、情けなの ものどもよ。
かう踏みつけむ、 にくき山。
斯う折りくれむ、 にくき松。

此の川水も かきにごせ。
此の岩がぬも 踏みくだけ。

(十七)

うち散らさむか、此の花も。
さても、戀しき 我が人に
似たる色香の いとほしや。
折りて、一枝、せめてもの
心なぐさに かざさばや。

(十八)

あな、うらやまし、めをの蝶、
昨日のまゝに 今日もまた
はなれぬ袂 ひきつらね、

さこそ楽しき 空ならめ、
霞がくれを うかれゆく。

(十九)

やよや、待ちてよ、めをの蝶
汝れに尋ねむ 人のある。
汝れ等と共に 我が昔
つがひはなれぬ 中なりし、
知らせよ、人の 行方をば。

(二十)

行きつとまりつ、めをの蝶、
招くと見ゆる 汝が袖は、
うれしや、行方、知らすとや。

いづくぞ、人は、蝶よく。
蝶よ、何處ぞ、我が人は。

(明治三十四年二月作)



病床の吟

一

思ひより入る いたつきぞ、
思ひは去れよと、人はいへど、
いかにしてまし、我が思ひ、
去れども、去れど、去りがたき。

二

思へど、かひなき 思ひなり、
思ひすてむと、我れも思へど、
いかにしてまし、我が思ひ、
すつれど、すつれど、すてがたき。

三

見聞くが故の 思ひぞや、
 見聞きなせそと、人はいへど、
 閉づれど、ものは うつりつゝ、
 閉づれど、ものは きこえつゝ。

四

海士ならなくて、たらちねの、
 もしほたれつゝ、今日もなほ、
 誰がためにかは 住みわぶる、
 よる年波に ゆられつゝ。

五

山がつならで、わきも子の、

なげきこりつゝ、今日もなほ、
 誰が爲めにかは 住みわぶる、
 うき雨風に やつれつゝ。

六

志のぶの軒の 志めやかに、
 今宵に似たる 春の雨、
 おなじ枕に きゝにたる
 友は、いつらは、其の友は。

七

おどろの垣の おどろしく、
 けさばかりなる 秋の風、
 一夜を命と きえにたる

露は、いづらは、みどり子は。

八

誠の道を きはめむと

さして出でたる ますらをが、

いつまで、ふみも 迷ふらむ、

君の光りに あひながら。

九

み國の花を 咲かせむと、

思ひそめたる 民草が、

いつまで、枯れも うもるらむ、

君の露にし あひながら。

十

二葉のみどり さながらに

千代もかはらぬ 峰の松、

花染めならで、人ごとに、

かゝるを、心の 世なりせば。

十一

もとのまづくの さながらに、

流れて清き 谷の水、

濁りに染まで、人ごとに、

かゝるを、心の 世なりせば。

十二

芥とばかり いやしみし

黄金は、寶と はやさされて、

寶とばかり みがきたる

廉恥は、塵と すてられぬ。

十三

死ぬとも避けし 詐りは、

さかしき人の 道となり、

死ぬとも守りし ま心は、

たはけのわざと なりはてぬ。

十四

いたでに立たぬ 膝をなで、

あはれ七度 生れてと、

君を思ひに 仆れたる

忠魂、こひしや、 その忠魂。

十五

六十餘州、 濁流の、

みなぎりはてし 世の中に、

一條すみし 菊水の

流れ、こひしや、 その流れ。

十六

思はむとすれど、 むすぼれて、

心の絲は 亂れつゝ。

ながめむとすれど、 かきくれて、

思ひの雲は 狂ひゆく。

十七

忘れむとすれば、 なかくくに、

いやましものは 思はれつ。
すてむとすれば、なかくくに、
思ひは、胸に つもり行く。

十八

つもらばつもれ、我が思ひ。
とてもかくても やみがたし。
つもりて、裂けや、この胸を。
裂けねば、やまぬ 思ひなり。



夜 半 の 梟

一

何にの嘆きを なげきかね、
なくや、梟、かなしげに、
うきよもねむる さ夜中に、
汝れのみ、獨り ねもやらで。

二

嵐も雨も たまらざる
汝れが宿りの つらけれや、
杉のどざしも あれがちに、
松葉が軒も ひまあらみ。

三

忘れがたき 思ひねの、
さめてこらへぬ 涙かや、
つきぬなごりを 限りにて、
別れもはてし 伴れありて。

四

思ひもかけぬ 山住みに、
すまぬ恨みの 涙かや、
捨てがたき世の 思ひゆゑ、
世を捨てはてし 汝れにして。

五

思ひのかぎり、 梟よ、

泣きてきかせよ、 汝が嘆き、
おなじみ山の さ夜枕、
こゝも、ねられぬ 伴れなりや。

六

語るかひなき 世の中の
ね入るが程に、 起き出でて、
獨りしのぶの 汝がなげき、
思へば、ゆかしき 限りよな。

七

きこえぬうき世の 外にして、
獨りも泣かむ 心から、
思ひ入りにし 我が山の

伴れとこそきけ、汝が嘆き。

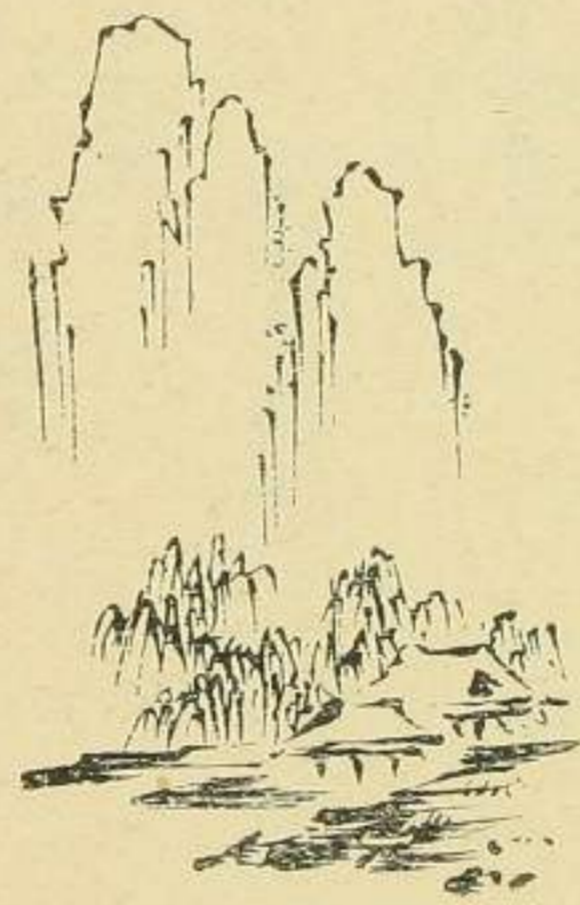
八

なげや、かなしき 梟よ。

樂しきうき世の ものゝぬに

病みもはてたる 我が胸は、

悲しき音こそ、慰さなれ。



草 籠

遠く父母に別れて、山陰の道の奥へ思ひ立ちたる途、さ夜ばかり、さよの中山にさしかりて、

父母の夢路も遠くなりぬらむさ夜の中山今ぞ越えゆく

出雲なる簸川の里に着きたるは、夕ぐれの空なりき。旅伏

山といふあり。

父母を八雲の外の草枕旅伏の山に日は暮れかゝる

さるまどひの席に招かれける時、

故郷を八雲の外に隔てゝもかたらふ友のある世なりけり

山窓の壁に、

入る山の心とてこそなけれども門の谷水軒の岩松

石見國安濃郡の奥なる志學の出湯にて、ある人の強てこはるしまし、思ふ心を、扇のはしに。

しきしまのやさしき道の奥がこそ心の水のすみかなりけれ

おなじ時、おなじ人に。この人、いと深く歌の道に思ひ入りたる人なりけり。

君により忘れぬ里となりけり思ひもかけぬ安濃の奥山

妻なると、都の事もしぬび語りて、

都べの花に心は残らぬどちのみあればは、そばあれば

こ年元旦の筆はじめに、

山陰の雪の下庵かきあけてはるかにいはふ御代の初春

教へ子の事を思ふ折りに

おほし立てて汝れが花見む時まては山もかひあるすまひなりけり

小田の里の一日

「今日もまた松ふく風の岡へゆかむ昨日涼みし友にあふやと」。去年の夏、かりそめに立ち寄りて語りたる松蔭の、ゆかしく思ひ出でられ、桂月を誘ひてさして出でぬ。小田の里なる錦織雄太郎ぬしのやしきなり。四五里ばかり遠からぬほどなれど、山陰の路の、しかも、小石しきつめたるを廻りもよからぬ車に引かれゆくなれば、歩まぬ脚も折れむとおぼゆる苦しさを、さしてゆく松の木かげを頼みにて、辛くも小車の上にゆられゆく。山の高きもあらず、水の深きもあらず、唯暑さにむされたる草の野みちをわけては、土づくりともいふべき家の見るかげもなくつきき、赤瓦の光りのみあやしく目をいる人里に出で、ことなる匂ひの風に送られて出づれば、またも、石に草にもゆる日影のく

るしき野路にかゝるのみ。心も腐れ、身もとけむばかりにおぼゆるを、思ひやる松のあたりの涼しさを身にしめて、やう／＼に小車の上なから、あへぎ／＼行く。旅行なれたる桂月は、苦しきけしきもなし。

空屋とも見えぬわらやに人はあらず、

尾なき蜥蜴の出で、また入る。

と、車の上よりよばはりて、山家のけしき寫し得たるにあらずやとほこる。げにとのみいらへて、しばしゆけば、またも

裸體にて暫し走りし配達の、

やがて居眠る、松の木蔭に

即景の妙いかにとよばはるも、評する心だになく、路のべに清水流るる柳蔭もあらば、しばしやすまむと思ふに、それもあらねば、おのれは、唯、

小車の唯はやかれと祈りつゝ、

こゝろにとまるくまもなきかな。

多岐といふ所をのぼれば、日本海は右手に蒼々どつゞきて見え初むるに、夏の野路にしをれたる心も、はじめてのびたりや。志したる木立もまじかになり、一枝二枝しづ枝の風になびくさまは、とく來よと招きうながすと見えてうれしく、心はやくその門をたゞきたり。

岸高く松蔭ふかき所に、主人が心づくしのさ席は敷かれたり。つらかりし來し方の暑さも、とみに忘れられて、心地よくうちむかへば、右はいなさの濱、一帯の白沙遠くひきたる末は、北山の青松の裾、日の御崎に至りて、白雲の間になびき、左はつぬさはふ石見の斷崖、遠く雲路のはてにつゞきて、岩橋の近く天の原に通ふとも見え、前は一面の青海原、よせかへす大波の末は、高く大空の岸をうつとも見ゆる壯觀、そ

ともも狭く隣りもせまりたる里にせまがりくらす身には、此の世のそとに出でたる心地するに、八重の汐路をふきこす風の、老松の間をわけて、そよくと一重の袖を掃ふ涼しさ、つもりたる心の塵も、なごりなく掃はれてか、なにとなう身も軽くおぼえ、主人の物語りも、今様の人なみに似ざれば、いつしか身はこれ天上の客となれりやとあやしまれたりや。

小田川に鮎のすなどりはいかに、試みたまはずやと主人が誘ふまゝに、悦びて伴れ立つ。水淺く清ければ、魚の遊ぶ影も、よく數ふばかりの谷川なり。鮎の姿をみとめては網うちかけて、中につままれたるを手取りにするなり。魚は多し、網うちも二人さへ伴れたれど、早瀬を好むほどの魚の、命をさへにかけたれば、にげはしるあしのはやさ、上ると見るかげは、忽ち消えて、遙に下にあらはれ、下ると見たる姿は

忽ち失せて、遠く上に浮ひ出で、影もどめかねたるばかり。底は大岩小岩の蒔き散らされし谷川なれば、網の下にかけらるゝも、岩間岩間を巧みにくゞり行きて、まさしく見たる姿の、地にやひそみけむ岩にや入りけむ、つひに見えず。さる中に立ちて、二人の網うちは、この瀬に追ひ、かしこの淵にせまりては手取りにするさま、馴れとはいへど、巧みなれや。あのれも、桂月も、たいあれよそれよといふのみにて、一尾をだに捕へ得ず。さながら魚にもてあそばれて、谷川をつたひゆく中に、桂月が幼子のまだ袴着の年にもならぬが、思ひの外にも一尾を手捕りにしたるふしぎさ。こは天晴れ手柄してけり、兩先生はいかに、幼児に遅れたるよと、主人はうち囃す。げに遅れたりや。

あくれたる我が世見せけり、幼子に

とりあくれたる鮎のすなどり。

とは、われながらあはれげなりや。

幼子が鮎の手取りは、おひさきに

立てむ手がらの程や見すらむ。

親心はいかにといへば、桂月は鮎とりあげて、しかもこの大やかなるよと笑み傾けり。思へば、ふしぎなれば、また、

時ならぬ紅葉とばかり見とれつゝ、

鮎やわく子の手にかゝりけむ。

と歌ひ戯れて、さても、この叔父さへよく捕へぬを、汝れが手にかゝるこそ、あやしけれ。盲の鮎にあらずやと戯れいへば、幼子は、籠なるを再びとり出で、盲にはあらず、目は二つあきたりといふあどけなさ。

あどけなきわく子の袖のやさしさに、

鮎も命やをしまざりけむ。

かくて、幾隈か瀬をうちのぼりゆくほどに、山やうやく高く、谷やうやく深く、あもしろき岩根の岸に出でたり。こゝに主人はかねて席を用意せしめられたり。酒さへ肴さへ、はやくもたらしめたまひたり。網うちの二人は、河原の石を籠につき、鮎を火にあぶりて、もち出づ。味の淡きこと、涼しき露となりて咽喉に下る心地す。酒は清し、肴は清し、主人が物かたりもまた清し、いつしか酔うて清風を吟ずれば、岸の老松、谷の清水、しづかに管絃の音をしらべあはせ、陶然として身はいよいよ天人の境に入りはてたる心地す。

主人のいはく、この淵のあたり、我が好みて遊ぶ所なれど、未だ名のおもしろきなし。我が爲めによき名もあらずやといふ。桂月とともく酔にまかせたるしれ業に、君の爲めに潜龍の淵とやいはむといふ。淵

の上に高く立ちたる二つの奇岩あり。一は鳳凰の翅をひろげたる如ければ、鳳翅岩とよばむか。一は龜の首をあげてぬりいでむけしきしたれば、龜躍岩とよばむか。さてこゝを四友の溪といはむかとして、うち笑ひぬ。知らず、主人が心になひたりや否や。
つきぬ興にうかれはてたる心を、歸らむと促す幼子に呼びさまされ、岸路づたひしてかへる。草短かに刈り去られたる堤の上に、一むらの女郎花の、やさしげに残りてたてるあり。

桂月

草はみな刈りつくされし土手の上に、

ひとむら残る女郎花かな。

げに、刈り残したる鎌の主のたづねまほしき心地さへする。再びもと
の松蔭の席につけば、松風は我れ等を迎へて、いよく涼し。岸に下

り立ちて、海水をあびなどするに、日は暮れかゝる。主人は、なほ語
らまほしき事もあり、しるべせまほしき海の遊びもあり。今宵はとま
りたまひてとすゝめらる。われも、千歳なほ短く去り、難からむとおぼ
ゆる松蔭なれど、桂月が幼子の頻りにとく歸へらむと家路を思ふ情に
促されて出で立つ。なごりいはむ方なし。

君が宿のこの松蔭を隣りにて、

あけくれとはむ我が世なりせば。



山人の妻

一

我が爲めならば、こちらの人、

此の山住みを、泣きなせそ。

君が爲めには、水の底、

火の中いとはぬ我れなれば。

二

玉のみ庭に、もとは、我れ、

君のいはるゝ身なりけむ。

塵もすゑじとなでられし、

昔は、花の身なりけむ。

三

君に知られし昨日より、

我が世のよすがは、君が宿。

君が情けの露をたゞ、

花の命の我が身なり。

四

昨日の玉のみ庭とて、

我が身に、何にか、惜しからむ。

君は惜みて、我が爲めに、

今日も惜みて、泣かるれど。

五

今日のおどろの奥とても、

我が身に、何にか、つらからむ。

あたら、花をば、埋れ木と、

我が爲め、君は、泣かるれど。

六

命とたのむは、君が露、

よすがとたのむは、君が宿。

何に、をしからむ、玉の庭、

なに、つらからむ、山の庵。

七

よそめはめでたき玉の庭も、

入りてを見れば、塵深し。

よそめはつらき荒山も、

のぼりて見れば、心すむ。

八

かやが軒端に、心なき

峰の白雲、おもしろし。

世にはのがれぬうき雲を、

玉の臺に見るよりは。

九

麻の衣に、朝夕の

岩根の車おもしろし。

世にはのがれぬ涙をば、

錦の袖に泣くよりは。

十

世のうま人の飾りてふ

玉のかざしは、すてたれど。

くもらぬ心の玉かざし、

天つ姫にも耻ぢぬあり。

十一

ま柴こる手のやつれても、

心はたけき武士の妻。

祖のみがきて傳へたる

古刀一ふり、なほさびず。

十二

心に飾る玉かざし、

心に傳ふ家の風。

なにか耻づべき、うま人に、

なにか耻づべき、山人を。

十三

涙を知らぬうま人の

のどけき昨日の遊びより、

我が爲めに泣く君がほどり、

賤の手業ぞ、おもしろき。

十四

さすがに晴るゝ雪間得て、

汝れがあへにと、谷がくれ、

根芹をあさる樂みは、

都の春に知らざりき。

十五

初鶯のねも添へて、

よはひをのべの小松引き、

千代をもかけてうかれしも、

思へば、浮ける慰さなりき。

十六

しののに濡れて、五月雨に、

君が助けと、を山田の

植うるさ苗の樂みは、

都の夏に知らざりき。

十七

山時鳥、ねもそへて、

花橘の五月雨を、

ゆかしき色にきゝにしも、

思へば、うける慰さなりき。

十八

秋の夜寒を、身にしめて、

君が衣にと、さ夜砧、

月にしで打つ樂みは、

都の秋に知らざりき。

十九

月の桂もちりそひて、

にほふ錦の屋形船。

うかれくし琴のねも、

思へば、うける慰さなりき。

二十

君と長夜のつま木にと、

雪ふり初むる深山路に、

柴こり急ぐ樂みは、

都の冬に知らざりき。

二十一

嵐に遠き窓にして、

をすの外山の初雪を、

花のはだれとめてにしも、

思へば、うける慰さなりき。

二十二

我が爲めならば、こちの人、
ものな思ひそ。なかくくに、
女子心の樂みは、

深き深山の今日の宿。

二十三

我が手づくりの新しぼり、

酌みて、憂きをば掃ひてよ。

憂きを掃ひて、こちの人、

妻がまことをくまれてよ。

二十四

門の山松、高くして、

藁屋の軒の、低くして、

君がすぐれしみ姿の、

いやまし高く仰がるゝ。

二十五

窓の嵐の、荒くして、

夜のふすまの、薄くして、

君が情けのやさしさの、

いやあたゝかく身にぞしむ。

二十六

酌みてよ、我がせ、新しぼり、

酔ひて、心の、浮くまでに。

君が心のうかるゝを、

待ちて、一言、きかまほし。

二十七

おどろの霜の深くして、

谷の日かけの寒くして、

み庭の花の、なかくゝに、

昔にまさる香は無きや。



深山の美人

その一

おぼろ月夜に あこがれて、
 よし野の奥に わけいれば、
 さくら吹きまく 山かぜの
 花のまぎれに さそはれて、
 ふみまよふらむ 谷のくま、
 家路もわかず なりにけり。

その二

駒をどいめて たしずめば、
 誰が世をしのぶ 庵ならむ、

軒もかきほも、 ふりつもる

花のはだれに うづもれて、
 たゞ一すぢに すみわたる

かけひの水の おどすなり。

その三

「あるじやあはす、もの申す、
 はなのふいきに 路はとぢ、
 かへりわづらふ 旅の鳥、
 あはれ、こよひは、花のやど、
 君が木ずゑに たのまなむ。
 願ふ」とよびて、たゞけども、
 しばし應答は、 なかりけり。

その四

さすがに人は 住みぬらむ。

「誰れ待つ宿に あらねども、
むぐらの門は、 さしもせず。

小屋の軒端の此のすゑを、
厭はずあらば、 いざたまへ。

いざ」との答へは、 たわやめの
よそにもほふ 花のこゑ。

その五

いづくの里も いつの世も、

人のこゝろの うれしやと、
つもるも深き しろたへの

花のころもで 打ちはらひ、
いざなふ儘に 立ち入れば、
見るも涼しき すゑむしろ。

その六

をとめは籠を 取り出で、

木の實に添ふる わらび草、
「わが身のみなる おく山の

世ににぬ饗」とすゑめつゝ、
ほゝゑむ袖の やさしさは、

この世ながらの あまつ姫。

その七

げにや玉しく 都だに、

住み憂かる世と きく者を、
こは白雲の かゝる山、

かゝるさびしき 笹の庵、
むすび初めにし 手弱女の
こゝろの奥の なつかしや。

その八

いぶかしみつゝ 言とへば、
をどめは聽て ほゝゑみて、

「人は玉とし うたへども、

都は塵の ちまたぞと、

思ひ知りたれ、われこそは、

いはねの床を 敷きてより。」

その九

なほ語るなり、たわやめは。

「雲の八重立つ 奥山の

おどろの奥の あけくれを、

柴のあみ戸の しばしだに、

さびしきものと 思ひしは、

すまぬ昔時の 我がこゝろ。

その十

「春さりくれば、おのづから、

のきの木末も ほゝゑみて、

かきねの草も ほころべは、

鳥も來鳴きぬ、窓さらず。

花もかをりぬ、床ちかく。

宿はかすみに うづもれて。

その十一

「夏としなれば、またさらに、

みねの小松の かげきよく、

谷の小川の おとすみて、

なくや古巢の 時鳥、

きくや嬉れしき 篠のかぜ、

宿は緑りに 木がくれて。

その十二

「秋さりくれば、おもしろや。

もしくさ千ぐさ 露ちりて、

あさちが庭も 色ふかく、

つまどに間なく 鹿もよび、

よひくごとに 月も訪ふ。

宿は紅葉に うづもれて。

その十三

「冬としなれば、いつしかも、

おち葉も雪も 降りつもり、

あるかなきかの ましは垣、

なほまつ風の をりくは、

訪ふや水鳥、谷づたひ。

宿は氷りに とざされて。

その十四

「思ひ入りてを ながむれば、

塵かきくもる ちまたより、

人くさしげき 大路より、

みねの月日ぞ 晴るゝなる、

まなくかゝれど、雲かすみ、

つねにつもれど、花もみぢ。

その十五

「うき世の人に くらべなば、

みやこの友に くらべなば、

花鶯や 勝るらむ、

草木のかげやまさるらむ、

ものいふ色に あらねども、

こととふ聲に あらねども。」

その十六

「げにおもしろの 言の葉や、

はかなき物と、人はいへど、

時はたがへぬ 峯の花、

をりはかへざる そらの鳥、

思ひて見れば、なかくくに、

都の友ぞ、岩木なる。

その十七

「さはさりながら 手弱女よ、

憂をばうしど 知りながら、

なほ捨てがたき 憂世をば、

みこゝろ強く おもひたち、
むすび初めにし いはし水、
床しきもとの しづくやな。

その十八

「昔時きかまし、さりしよの。」

由縁とはまし、ありしよの。」

幾たびそたび 問ひよれど、
をとめは、たえて 應答なく、
こゝにも散るや、花ふいき、
ほかげに匂ふ くれなゐは。

その十九

「いはねのもとの うもれ水、

埋れ果つべき 身にしあれば、

音に立べくも あらねども、

あさざは沼の あさき世を

君もいとふと 聞くからに、

深きこゝろの なつかしや。

その二十

「いまそかりせば、父母の、

わも、なでし子の 若葉ぐさ。

塵だにすゑぬ ものどのみ

おほしたれし 其の時は、

雲ならなくて、よし野やま

かゝらむ世とは 思ひきや。

その廿一

「げにちゝのみの 父のため、
 あなは、そばの 母のため、
 我れや根ざしの 姫小まつ、
 たゞ一もとの ひめ子まつ、
 千代の眺めど かしづかれ、
 時なきいろに はやされぬ。

その廿二

「わらはが十歳 春のころ、
 野邊の蝴蝶と あこがれて、
 茅花^{つばな}すみれに 日を暮らし、
 かへりゆく門 まもる母、

『千代や待たれつ、我兒來よ。』

汝れにあはせむ 人のある。』

その廿三

「ふりわけ髪を かいなで、
 父は云はれぬ、母もまた。
 『こや汝がための 兄うへと
 むかへうけたる まもる君、
 なが行く末を まもるぎみ、
 千代な忘れそ、汝が名なる。』

その廿四

「おなじかきほに、隔てなく、
 若菜つむなる はらからを、

よそのみ庭に 見るにつけ、
うらやましくも 思ひたる
をさなごころの、事もなく、
兄を嬉れしく おもひしを。

その廿五

「真茂留と呼びし 其の人も、
おきふし露の いとまなく、
いつき仕へて、父母に、

まなびの窓の ひまあれば、
あをもともなひ、月花に、
人はやさしく おぼえしを。

その廿六

「父なる人も、母なるも、

學びのみちに すさまれつ。

『もの知るからに 人といふ。

まことの人に ならまくば、

ふみこそ學べ、わが子よ』と

いはれし事の 平生にかも。

その廿七

「こころ盡しの さるからに、

皇國のみちは、あもふみぬ。

真茂留の君は、ことさらに、

唐土の道にも 分け入りて、

尙ほまのあたり 見むといふ、

すゑはるかなる西のくに。

その廿八

「いかでいなまむ、父上も。

『流石に我が子 おもしろや。

汝れが學びの 道ゆゑに、

いとふことかは、家たから。

疾く行けかし』と、の給ひぬ。

學ぶぞ人の たからとて。

その廿九

「思ひたちたる たびごろも、

人のかどでの ありし日は、

わらはが二七、春半ば。

朦朧げながら、よのこゝろ、

すみれ摘む野の 友とのみ、

おもひし昔に 似ざりけり。

その卅

「父はいはれぬ。『やよ眞茂留、

日の入る浦の すゑ見るも、

汝が出づる日の もとの峯、

かへすくも わするな』と。

人もいらへぬ、繰りかへし、

『ふみはたがへじ 本すゑを。』

その卅一

「母はさすがに、わかれ路の、

いと細げに おはししが、
わが身がかざす 花取りて、

『真茂留の君よ、忘れてよ、
このひともとの 花を』とて、
旅荷のはしに さゝれけり。

その卅二

「花取りあげて、其の人も、
『今よりむかふ 外つ國の、

まなびの窓の 春秋の、

おもひ出にせむ、この花を。

わが名にかけて 守らむ』と、
かざしくよろこび 給ひしを。

その卅三

「なにとはなさの 悲しさに、

わらはは泣きて ありけるが、

『たつ田の山にあらぬに』と、

『きこえし事は おぼえたり。

『大和は越えむ』と、其の人も、

いはれし事は きこえけり。

その卅四

「八重の潮路の はてなれど、

沖ゆく舟の 往きかひに、

女は來たりぬ、たえまなく。

父をあふぎて、かげながら、

母をしたひて、よそながら、
あをも教つて、みづぐきに。

その卅五

「春は花にも さきだちて、
軒ばににほふ 文のいろ。
秋は雁をも 待ちがてに、

とほそにおつる玉のこゑ。

『ひと夜や千代の思ひぞ』と、

いつもいはれぬ、言の葉に。

その卅六

「年はふたたび 暮れゆきて、

三とせの春は あけにけり。

つねには似ざる 鳥のあと、
花ちるまでも 音はなく、
青葉が末に なりてより、
はつかに聲は きこえけり、

その卅七

「學びのみちの 奥ふかみ、
おもひの外にうつりゆく、
月日の空と 聞くからに、
しぐるゝ庭の あさぢふに、
おくれてたよる 秋のふみ、
ことわりふかく 思ひけり。

その卅八

「みなとをめぐる 蒸汽船の、
煙りは間なく たなびけど

雲のたえく、玉章は、

彌いたまさかに 成りにけり

學びのまどの 雪ふかみ、

文のかよひ路 かたしとて。

その卅九

「四とせにつもる 旅ごろも、

たつき無き身と 思ふから、

夜寒をいとひ 暑さとひ、

つゝがなかれと 送りけり、

乞ふにまかせて 黄金をば、

あるにまかせて 白金を。

その四十

「わらはが親の やどとても、

玉しくきはに あらざれば、

塵のみふかく なりにしを、

『なほ一とせ』と のぞむまゝ、

父はひさぎぬ、家倉も。

教へぞ人の たからとて。

その四十一

「まなびの海も、つゝがなく、

花のみなとに 舟はてし、

春はかへると つげ來せば、

舟路の代と よろこびて、
母はひさぎぬ、からぎぬを。
わらはも去りぬ、玉かざし。

その四十二

「こゝにも思ひわたりたる。
入しほのなだの浪こえて、
かなたは着きぬ、難波津に。
生みのみ親のまつの巨を、
なほ一夜さの假りまくら、
明日は吾妻と報^つげ來しぬ。

その四十三

「父はかどべに、母は外^どに、

「わらはは軒に たしずみて、
ながむる一日 またいく日、
待ちわびにたる 夕まぐれ、
『つゝがのありて 日數』と、
きくかひも無き 人のふみ。

その四十四

「つゝがを何にと しら雲の、
こゝろも空に 迷ひ出で、
父ははるく、こゆるぎの、
磯のいそぎに 來て見れば、
なにはの假り屋、春ふかく、
蝴蝶に似たる 人のかげ。

その四十五

「よもの毛だ物 すらだにも、
 もとの情緒は あるものを、
 きくもあさまし その人は、
 つゝがも無くて、難波津に、
 今を春べと ながめたり、
 外國の花さへ 折り添へて。

その四十六

「人のこゝろは、はなごろも、
 移るものとは 聞きにしが、
 人のこゝろは、浮ける雲、
 頼めぬものと 聞きにしが、

おもはざりけり、其の人を。

おぼえざりけり、斯く迄に。

その四十七

「ものは離縁ぬと、潔ぎよく、
 父はさすがに のたまへど、
 おぼしたてたる わか竹の、
 みさをの色の かへてより、
 霜はふかくぞ なりにける、
 残るよも木の 髪のうへ。

その四十八

「母のなげきは、なほさららに、
 なにといふべき 方もなく、

思ひつもへつ、かげらふの、

やがてはかなく なりに見。

おなじ空へど あこがれて、

間も無く父さへ みねの雲。

その四十九

「たらちの親の 露なくば、

あさちが庭の ひめ小まつ、

千代は誰れをか 頼むべき。

戀ひしや父母、なづかしど、

こゝら戀慕へば、なほ更に、

犬じものなる 人にくし。

その五十

「たのむよしなき 難波かせ、

惜むこゝろは 無けれども、

いはで消えにし 吾妻路の

草葉のかげの うらみをば、

一葉なりとも きこえんと、

さして出でたり、難波津を。

その五十一

「雲にかすみは うづもれて、

とがたと知らず まよふ路。

來し方行くへ 見えぬまで、

ふりしく花に、おもはずも、

うき世の空の わすられて、

むすび初めにし 谷の水、
本のしづくは かゝりけり。」

その五十二

かくと語りて、たわやめは、

「あな何ならむ、をかしさや、

いはがき清水 いはでのみ、

すみはつべくも 思ふ身の、

よしなき音には 咽びつ」と、

はらふもすゝし、袖のつゆ。

その五十三

「こはいとほしの千代の君。

わが身一とせ、其のひとと、

學びのまどに 在りしとき、

うらやましくも 思ひける

かざしの花の ゆかりとし、

思ひあはせば なつかしや。

その五十四

「千代はものかは、萬づ代も、

世に見まほしき 姫小まつ。

かゝる深山の うもれ木と、

よそに見すてゝ 歸りなば、

われもあだしと 謠はれむ、

こゝろしあらむ 世の人に。

その五十五

「なにはの浦は つらくとも、

なほ住み吉の 岸もあらむ。

いざ給へ」とて、すゝむれど、

をとめはたえて 言葉なく、

とどさぬ窓に さしのぼる、

朝日のかげを ながめたり。

その五十六

今は誘はむ よしもなみ、

袖をしぼりて 立ち出れば、

かなたも流石 をしからむ。

「花さくをりは、またたまへ、

清水むすびて待ちてむ」と、

おくるもあはれ 門ちかく。

その五十七

さらばといひて、幾たびか、

路をたづねて わかるれば、

駒も心の ひかるらむ、

なくやふた聲 また三こそ。

手綱ひかへて 見かへれば、

霞がくれに 蝴蝶とぶ。



道灌山の虫

ふる里に、誰れまつ身にはあらねども、風なきにしをるゝかきねの薄、はらはぬにこぼるゝ萩の上葉の露、もの思ふとはなけれど、何となう、ながめらるゝ秋の夕ぐれ、いづくも同じとはきけど、野邊は、されども、またそいろに、心ゆくかたもやと思ひ立ちて、道灌山は好めるわたりとて、あこがれゆきぬ。

道灌山といふは、昔の人の忍が岡の奥、日暮里の諏訪臺につゞける岡にて、彼の太田道灌が住みけるゆかりより、山の名をぞおひたりける。今も花見寺の隣りなる古寺の中に、馬琴翁の筆塚と並びて、繫舟庵の碑とて、建てたる石あるは、やがて道灌が庵の跡なりとかや。道灌が江戸城を築かむと、圖を案じたるも、此の所にすめるほどなりとか。

其のころは、浅草わたりは、なほ一面の海にて、近く此處わたりまで、潮の入江なりければ、道灌が、我が庵を

わが庵は松原つゝき海ちかく

富士の高根を軒端にぞ見る

どうたへりとなんいへるが、如何ならむ。たしかならず。

岡のべには、櫻あり、梅あり、桃あり、杉あり、常盤木あり、今は東の裾は、一面の田畑にて、そが末は、近く隅田川の流れを、木の間にくれに見、遠く筑波山の峯を、雲間に見れば、けしきはいつはあれど、秋こそ殊更あはれは深く、虫にはこゝぞ都の名所なる。

山ぎはなる野菊、野萩、尾花、千草八千草、思ひくゝのやさしき色にいで、まねきかくれば、麓の小田の稻穂も、一かたによらむとや、穂にあらはれて、さはくゝと、こらへずや靡くけしき、案山子もいかに

見るらむ、持ちたる弓の手つきも、をかしげになりておぼゆれば、そ
 いろにうちゑまれて、うちわたせば、錦なすもみちが木がくれを、白
 帆か水鳥か、見えつかくれつゆく彼方には、遙かに、あをくどすみ
 わたりたる天つ海原に、うす墨色してうかべる筑波根のけしき、おの
 れもし畫かく男子ならむには、筆捨塚は、此處にこそたてめなど、ひ
 とり思ひ興ずれば、秋のさびしさも忘れられて、其處此處と、うかれゆ
 くまゝに、日は何時しか暮れて、もの静かなる山邊に、虫のぬすゞし
 く、月いとあかし。月には、虫には、はしなく思ひ出づる事ぞ多か
 る。

岡の岸なる頂きに、藪を其がまゝのましばがき、風雅に結びたるさ
 しやかなる庵あり。住人は碧山人とよび、世をすねての隱家なりける
 が、三年ばかり昔に、世を去りてかへらず。其の後は、伴なりける刀

自と、忘形見たる女の童とが、互に助けつゝ、庵を守るなり。おのれ
 もどよりの知己にあらず。六年ばかりむかし、其の頃親しき友なりけ
 る人と、虫のぬきかんとて、此のわたりにいでたる折りから、門に
 志ぶ茶めせ野邊に山邊に幾里の

あはれを見るが此處の御馳走

と建てられたる碑の言葉に媒せられて、初めてあひ見しより、そがも
 のまづかなるけしき、まかも、住める翁夫婦が、よろづかざりなき心
 さまのいとほしさに、花みむとては春、月見むとては秋、木かげをし
 たひては夏、雪にあこがれては冬、うさはらさんとは學びの窓の隙、
 心の紛れざらん爲めとては、むづかしき書よむ折りふしに、常に友な
 りけると、共に絶えず訪づれけるが、此の一年ばかりは、その昔には
 似ぬ月日をすぐしけり。

思ひいでゝおとなへば、女の童はまづ迎へ、刀自もやがて出で来て、
 さても忘れてなどよろこびきこえて、つねに伴れ立ち玉へる彼の友な
 る方はどとはるゝも苦しや、忘れはてんと思ふに
 彼は見すてたり。最早友にはあらずといへば、あなさばかりかたくお
 はしたる友垣を、いかなるいさかひまてか、破りたまへる。刀自がふ
 たゝびもとに結びかへしてんといふ。いな、うちおきたまへ。彼は人
 に義ありけり。余に信ありけり。されど、彼は人を欺きたり。余を欺
 きたり。彼が信も義も、皆偽りなりけり。彼は利己の爲めに、暫時信
 を假装し、義を虚飾して、人の愛を買ひ居たるなり。彼は去年學を卒
 りて、世に獨立獨歩の身となれり。彼は世に用ひらるゝやうなれり。
 彼は遂にあるまじき不義をあらはせり。彼は遂にかひなき不信を示せ
 り。彼は口惜しくもあるまじき色に溺れたり。彼はあさましくも、あり

五〇一 道 灌 山 の 虫

がたき恩を忘れたり。彼はきたなくも、彼が平生の言を食みたり。彼
 は情なくも、朋友の誠をこめたる言葉をも、また塵とすてたり。彼
 偽信、偽義、偽忠、偽孝、偽友、偽愛の人なりけり。おのれは、彼が
 容貌を友とせしにあらず。彼が五體を友とせしにあらず。唯彼が心を
 こそ友としたるなれ。さるに、彼が心、皆偽りなりけり。さればぞ、刀
 自よ、おのれは齒がみをして、彼と交りを絶ちたり。さりながら、刀
 自の君よ、彼を見る十年一口の如かりし友情、たちてもたちかぬる愛
 着に、おのれはふたたび思ひかへして、彼が過去をせめて、彼が未來
 を救はんとせり。されど、彼は、反て、おのれを詈り、おのれを罵りぬ。
 おのれも遂に涙をのみて、彼を思ひ捨てたりといへば、げに道理に侍
 る、一樹の蔭だにたつはくるし、ましてや十年の友、たつはさこそ苦
 しみの限りならぬ。されど、人は心にこそ侍るなれば、心くされては、せ

んなし。さるにても、彼の人が、さばかりの人なりけんとは、くちをしかりきなどいふ刀自の顔を、つくつくとうちまもりたる女の童は、妾は初めより彼の人嫌ひなりき。妾を見てにこくと笑ふ顔の、何となう恐ろしかりき。おん身はよき人なれど、彼の人如き友と交るはをかしやと、密に母さまにつげたる事もありきと、何となき女の童の一言に、あはれや五尺の男子が、もろくも打たれたり。友はよく擇ぶべきものにこそ。

月はいよ／＼てりまさり。野邊も山べも、ましろにほふ露の草むら、誰がいかばかりなる駒や踏むらむ、仰々しき戀虫、かまびすけれど、これもいさむときけば、にくくもあらず。われ來にけりとにはあらざらめど、をりふしふりいで、鳴く鈴虫は、うれしきものゝ限りなるに、まつとはよべど、うらむいろなきまつ虫のねのあはれにやさしき。虫

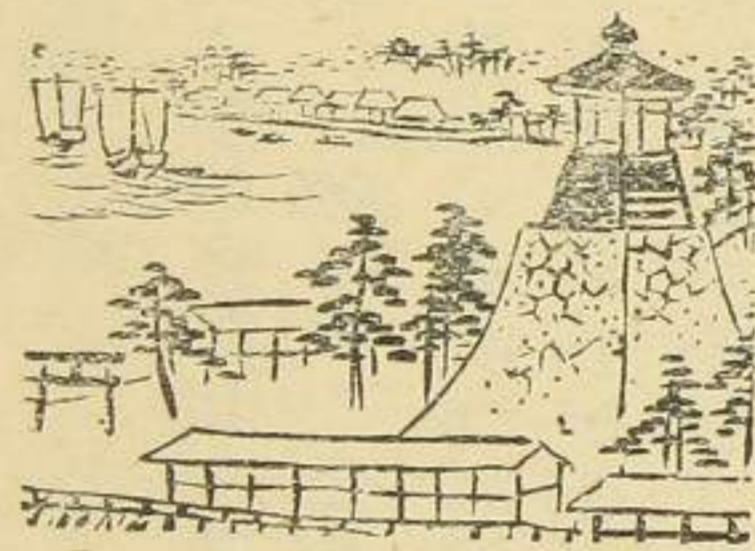
はかなしきものとのみきくべきやはなどもの語りて、興ずる折りから、里の童とおぼしきが、どや／＼とうち入りて、虫とりさやぎ、はては前裁をさへ踏みしだかんとするに、制しやれば、いつのまにか、洋服きたる官人の、あやしき女の手をさへ取りたるが、入り來りて、所有主もなき虫を捕ふるを、制する者やある。とく取れや、童ども。錢は高く取らせん。余が指圖して、取らすなり。制するやつは誰ぞなど、無法なる高聲。にくさもにくければ、誰ぞ、酔狂者めが、狼籍すなどのしりつゝ、踊り出づれば、さすがに、にぐるが如く出でゆく姿は、見まがふ方もなき彼の友。さても、あさましきものゝ限りや。

興もさめはてし、ながむれば、母刀自は銚子など取り出でし、けだ者の不禮など咎めな給ひそ。和君は今年めでたく業を卒へたまひにたる由、志ばかりのよろこびを納めてよと、酒などすゝむれば、女の童も共に

すしめつゝ、これよりは故郷にや歸り給ふ、遠き鄙の任にやゆき給ふ、いづれ残る事の悲しやなどなげく。いな、なほ五歳六歳は、おのが志したる道の奥家を究めん心のやみかたければ、かくて都にて住まむと思ふなり、和君はまた里わたりに出でたまはずやとどふ。いな、いかでか。妾も此處は去らじ。なまじなる世にまじらんくちをしさは、父上がくれくもいましめ給へれば、かくてぞ靜かに母上に孝養せよとは、父上が返へすく遺したまへれば、妾は何處へか出づべき、移るべき。彼の門なる碑の建ちてんかぎり、妾はかはらでかくてあるべきに、たまさかのおとづれば、たえでもたまへ、母上を慰めまらする便りにと、きくもやさしき志。おぼえず涙にむせば、ちかき草むらの虫の音さへ、とみにしめりておぼゆ。

さても、これは小學の業だに、たどくしき女の童なるを、彼の友なりけるは、如何にぞや。上もなき高尚なる學校に入り、上もなき一かどの學びを究めたる人なるに、行ひは下等なる四足の獸にも劣りたるあさましさ。思へば、人は何事も心が本なり。學問は末のみ。若き人たち心したまへ。

(明治二十六年作)



瀧の川の紅葉

わづかに王子の町を隔て、近く飛鳥山と引きつゝきたる岡を、五六町あまりゆけば、金剛寺といふ寺あり。王子瀧の川村の金剛寺とて、關伽井の水も、いとふるき昔よりすみつかれにし御寺なりといふ。境内はいと狭く、名山名石は、もとよりあるにあらねど、さゝやかなる谷川の流れありて、水あをく、ふち深く、やゝ峻しき崖を爲したる岸に臨みて、かへでの木こゝら植ゑたるが、秋の末もみぢするころは、やゝ紅の山錦の流れ、秋の一小山水を爲すものから、瀧の川の紅葉とて、秋くれかゝれば、都人の袖ふりはへて、紅葉狩るべき名所とはなりぬ。

山里に生れたればにや、山水草樹を愛するも、おのれの僻にて、都にう

つりてより、學の窓のいどまには、秋は殊更、春さへ夏さへ稀れにはどひぬ、さゝやかなれど、溪流のけしきが、故山のやうすおぼえてなりけり。また風雨にまかしたる樹木、草にまかしたる崖や岸の、露ばかりも粧り構へたる所なきが、一かど面白くおぼえてなりけり。さるを、一歳まちかけて、秋の末おとづれたるに、つねにわがゆく袖を招くがごとくおぼえたる岸の小草のなつかしき袂は、いつしか残りなく刈り拂はれて、あかく黒き岸の土くれが、いまはしくも、むくつけき面を、あらはにさし出したるも、あさましく胸わるきに、崖の上には椽臺いくつとなく据ゑ、毛氈しきつらねて、里の少女どもが茶を煮てすゝむるは、あしくはあらねど、そが中に西京生れとおぼしく、女のごとき男が、舌だるき猫なで聲して、いはでもよき言をつくりいひ、笑まずともよき事に、殊更につくり笑ひなどして、一向に媚を呈

するさま、うち見るより嘔吐を催さんばかりをぼゆれば、早々に袖を拂つて立さ去りたるより、其後は絶えてまたゆかずなりぬ、さばかりにつねに訪づれたる身も。何事にも殊更に粧り飾り殊更に結構するといふ事、いたく忌まはしく、あらずもがなにおのれは思へばなり。何事にも、あるがまゝがよし。つくるといふ事、きたなきことなり。さればぞ、世の中の人、大かたはきたなきなる。

かくて三歳四歳ゆかず、一昨年もとはず、去年もたづねず、今年はさてもいかにかなりけむと思ふ折りから、久しうなりたる昔の友來りて、さても互に世にうつり變りたる事よ、諸共になれくゞて踏みたる野山は如何、いざけふはこゝかしこ名残の秋をたづねむといふに、さらばとて道灌山より山づたひ飛鳥山をも越えて瀧の川をわたれば、水色むかしのまゝに流れて止まず、崖の紅葉のすぎにし秋の色に出で、變ら

ぬに嬉れしく、ありつる岸のむくつけき面は、なほかつく見ゆれど、今日は彼の胸わるき猫聲の女なせる男の見えざれば、心地すゞしく、あどけなき女の童のくみてすゝむる茶の薫り、一入ゆかしく、うち悦びつゝ、うちわたせば、此の年月よそにすぎにしわが身の、今日は、われと恨み出でらるゝもをかしきばかりに、たのしくうち見てあれば、あやしく近くきこゆる猿の笑ひどよめく聲、馬のふみどいろかす音。あなやと見かへれば、猿もあらず、馬も見えず。唯猿の聲馬の音と共にのぼり來れる女の一群ありけり。どや／＼とよせ來りて、椽臺もゆらぐばかりに、がたがたと腰を下し、がや／＼とのゝしりあひあざれあひ、はては姫御前のあられもなや、紅葉は二月の花よりも紅なり、車とめてそゝろに愛す楓林の晩など、唐詩を高らかに鳴らすあり。頭髮は皆束髪にて、赤き毛を不作法にまるめたる頭を、縦に横に、上

に下に、右に左に、うちふりて狂ふさま、人心地もせず。悪魔の襲ひ
來りたる如くおぼえて、取るものも取りあへず、いそぎ崖をにげ下り
て、見かへれば、紅葉がくれに猿とび馬の狂ふかげすこし。さても父
もあらむに、母もあらむに、教の師もあらむに。

(明治二十六年作)



山 莊 獨 興

一

うき世の人の 笑顔をば、
よそにはすれど、 ま柴垣、
ほゝゑむ自然の 伴れはあり、
やまと撫子、 山ざくら。

二

あまき浮世の 人のねを、
よそにはすれど、 ま柴垣、
語らふ自然の 伴れはあり、
いはねの清水、 いはね松。

三

よそめわびしき 深山こそ、
樂しき常の すみかなれ、
染めむ浮世の 塵はなき、
こそぞ、玉土の 奥なれば。

四

なれの篠屋の 低くとも、
低しと身をや なげくべき。
たゞおきふしの みさをにぞ、
人の位は あるものを。

五

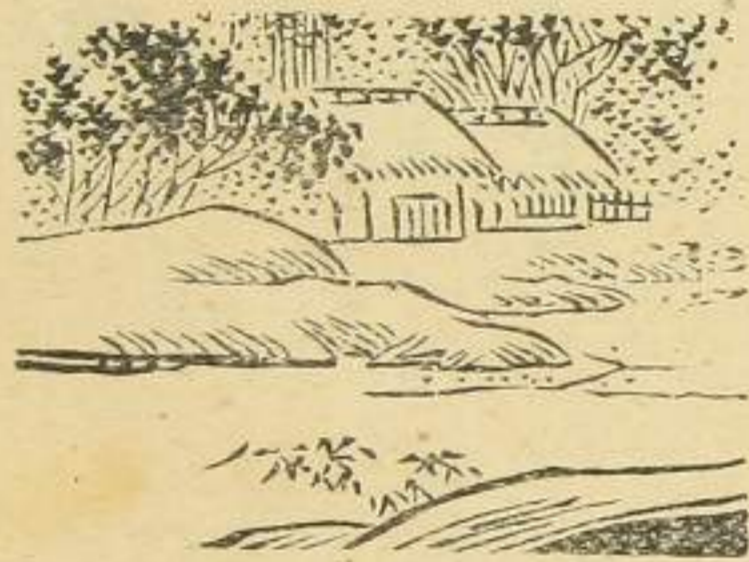
建武の御楯と 身をくだき

六

今も皇國の 守りなる
楠公、もとは 山人ぞ、
河内の奥の 里にして。

七

あしたに晴るゝ 峯の風、
けがれぬ自然の 誠見え、
夕べにすめる 峯の月、
曇らぬ自然の 誠見ゆ。
おきてはむかふ 軒の山、
動かぬ自然の 誠見え、
ねては枕の いは清水、



誠の道を ふみとげて
 人のかいみど なりにたる
 楠公、もとは 山人ぞ、
 河内の奥の 里にして。

明治三十三年一月作

つぬき自然の 誠見ゆ。

八

よそめわびしき 深山こそ、
 樂しき常の すみかなれ。
 自然の誠 さながらに

見ゆる此の世の 里なれば。

九

雲におどろに うもれても、
 うもると世をや なげくべき。
 進む誠の 道しるぞ、
 人は爲すある 者なるを。

十

元 旦 即 興

一

くめや、わきも子、若水を。
くみて、祝はむ、君が代を。
すむや筒井の、ま清水の
つきぬ車を、かりぎなき
わが大御代の、ためしとて。

二

かゝげよ、わきも、日の御旗。
かゝげて、祝はむ、君が代を。
さすやしづけき 朝日かげ

ゆららににほふ 旗風を、
君がみいづの、ためしとて。

三

ひけよ、わきも子、破れ琴を。
ひきて、祝はむ、君が代を。
たへぬあまりに 取り出でて
ひく破れ琴の 調べこそ、
治まる御代の 聲ならめ。

四

我れもうたはむ、鄙歌を。
うたひて、祝はむ、君が代を。
たへぬあまりに 音に出でて

うたふや鄙の だみ聲ぞ、
治まる御代の 聲ならむ。

五

今日立つ年の のどけさは、
さながら、君の たまものぞ。
君が御代をば いはふこそ、
やまとしまねの 民草が
今年の業の はじめなれ。

(明治三十三年一月作)



寒 山 樵 歌

一

光りまばゆき 位山
高きあたりの わたらひは、
よのよき人に まかせてむ。
しづにはゆるせ、奥山の
おどろの奥の 谷の庵。

二

風あたゝかき 花の園
にほふあたりの わたらひは、
よのよき人に まかせてむ。

しづにはゆるせ、あらしの
あらし烈しき 森がくれ。

三

道なきおどろの 藪垣は、
あやなき思ひの 伴れにして、
吹き立つ峯の 山風に

さけぶ門わの 森のねも、
あしたは、なげきの 伴れとなる。

四

ひまなき忍ぶの 軒の露、
こぼす涙の 伴れにして、
岩ま／＼に せかれては、

むせぶ谷間の 水の音も、
夕べは、枕の 伴れとなる。

五

位の山の 高嶺にも、
樂しき光りは 見えぬなり。
世のよき人に 似ぬ賤は、
ほゝゑむ花の 園わにも、
ゆかしき色は 見えぬなり。

六

世のよき人に 及ばざる
しづが心の かひなさは、
思ひの外の すみかなし、

泣くを、此の世の 慰さにて、
涙を、今日の 命にて。



(明治三十三年一月作)

つ ま 琴

三歳の日数は 浅けれど、

馴れをつま琴、 あはれやな。

たまらぬ破れ屋の 霜ふかみ、

いとも、いたくぞ やつれたる。

つき琴なれや あて人の

つま琴なれど、 汝が親は、

心の糸も つくしてぞ、

つくりあげけむ 姫琴が。

いかなるいどの 心ねの、

かくも、あやしく 引かれ来て、

かゝる名もなき 志づのをの

つま琴としも 志づみけむ。

玉琴なれや 玉床の

玉琴なれど、 汝が親は、

心の下ひを つくしてぞ、

つくりあげけむ 姫琴が。

いかなる下ひの 心ねの、

かくも、あやしく 志たひ来て、

かゝる野末の 草のやの

つま琴としも うもれけむ。

世にはやさるゝ あで人の

ときめくみ手に 取られなば、

汝がかいなでの 一節も、

上なき音とや いはれむを。

かゝるかひなき 賤琴と

志づみはてたる、 あはれやな。

ゆかしき汝れが 糸ながら、

世にいやしくも すてられて。

玉なす殿の 奥深く、

錦の床に 据ゑられて、

塵だにすゑぬ 寶ども、

世にめでられて あるべきを。

かゝる枯れ野の 草琴と

うもれはてたる、あはれやな、

ゆかしき汝れが 糸ながら、

見るかげもなく やつれはてし。

思へば、あれが 草のやは、

汝れが爲めには、あたらむ。

思へば馴れの この賤は、

汝れが爲めには あたらむ。

汝れには、あたる 宿なれど、

あはれと思へ、草のやを、

わが心にも あらずして、

うもれはてたる 宿なれば。

汝れには、あたる 身なれども、

あはれと思へ、志づが身を、

わが心にも あらずして、

しづみはてたる 賤なれば。

草屋なれども、賤なれど、

あはれと思へ、あれが身を、

朝夕さらぬ 手馴れ琴、

汝れをなぐさの 我れなれば。

汝れがやさしき 調べゆゑ、

春は、のどかに おぼえけり、

むぐらが奥に うづもれて、

花もさびしき 宿なれど。

汝れがすゞしき 調べゆゑ、
夏も、すみよく おぼえけり、
もゆる日かげに やつれはてし、
いぶせき草の やどなれど。

汝れがゆかしき 調べゆゑ、

秋は、たのしく おぼえけり、

軒のうき霧 定めなく、

月もにほはぬ 宿なれど。

汝れがやさしき 調べゆゑ、

冬も、すみよく おぼえけり、

かきも軒ほも 霜かれて、
嵐のみ吹く 宿なれど。

汝れが糸をば、なぐさにて、
はつかに結ぶ 草のいほ、
玉なす床に あらねども、
あはれと思へ、つま琴や。

汝れが糸をば、なぐさにて、
はつかに結ぶ 玉の緒ぞ。
あでなる身には あらねども、
あはれと思へ、つま琴や。

泣くか、やさしき 汝が糸の、
いとも細げに きこゆるは。
泣けよ、つま琴。 世の中は、
泣くより外の 慰めぞなき。

泣きて、きかせよ、つま琴や、
汝れがやさしき いとの音を、
琴の下樋の 朽つるまで、
糸の力の 絶ゆるまで。

汝れが朽ちなむ 夕べこそ、

忍ぶが軒も 限りなれ。

汝れが絶えなむ 夕べこそ、

あれも、此の世の いまはなれ。

絶えなば、絶えて、 時さらず、

朽ちなば、朽ちて、 所さらず、

一つ春より 一つ苔

一つ根ざしの 土どならむ。

(明治三十年作)



やぶれ 琴

一

柴こりくらし かへる子の

笛のね遠く かきくれて、

あらしになり行く 深山べに、

今宵も、月は すみのぼる。

二

誰が思ひ入る 奥山の

志のぶを琴の 音なるらむ、

吹きしく霧に 志めればや、

いともかすかに かよふなり。

三

ふもとの谷に 吹き沈む

風と共に、音は消えて、

いはねにかゝる 瀧の糸の

志らべぞ、獨り すみわたたる。

四

よわるとすれば、吹きあれて、

木の葉を下す 山風に、

また一と志きり はらくと、

ゆかしき音の きこゆなり。

五

いぶかしみつゝ とめゆけば、

ありし音色は また消えて、
彼方に遠く、さを鹿の

今ぞなくる、つまとひに。

六

なほ分けゆけば、一と志きり

おどろさや立つ 山風に、

またさやくと、琴糸の

いよよ亂るゝ 音すなり。

七

いつべの里の つま琴を、

こたへやすらむ、山彦が。

ひいきは、またも かけ消えて、

なくや梟、聲さむし。

八

いよよのほれば、いや近く、
一とむらまげる 笹がくれ、
またきこゆなり、琴のねは、
露ちる風に 亂れつゝ。

九

聲するまゝに わけ入れば、
笹野は、もとの まがきにて、
何時より嵐に まかしけむ、
まばらに残る かやが軒。

十

昔はすみも つれにけむ
秋の夕べの 月かげも、
やつれはてにし 窓のべに、
誰が残しけむ、あづま琴。

十一

誰が手ならしの あづま琴、
なれにし人は。いかにせし。
誰れにおくれて、汝れ獨り、
嵐のやどに むせぶらむ。

十二

絶えぬばかりに、琴糸は、
一ときは悲しき 音をあげて、

たまらぬ軒の 夜嵐に、
またもや、志のに 亂れゆく。



(明治三十一年一月作)

戀ひの山人

ま木の立つ

(一)

あらし山奥に うもれても、
ほほゑむ汝れが 笑顔あれば、
月の桂を 手折りつゝ、
天つみ國に 住むがごと、
我れは思ほゆ。

あらしの

(二)

藤のたもとの 芽つれても、

たづさふ汝れが 袖あれば、
天の羽衣 着もなれて、
神の宮居に 住むがごと、

我れは思ほゆ。

(三)

こゝにして

見れば、垣根の うき雲も、
たゞ妻ごめの 八重垣や。
よそにはすでき 山風も、
天つ小琴を きくとのみ、

我れは思ほゆ。

(四)

山人と

うもれはてたる 汝が山邊、
思へば、うれしき 常世なり。
汝れが山邊を 離れては、
何處もならくの 底とのみ、

我れは思ほゆ。

(明治三十年四月作)



戀 ひ を

一

戀ひを互ひの 玉の緒と、
 汝れが言葉の まにくくに、
 かけて結びし くやしさを、
 ながしとはかり おぼえつゝ、
 亂るゝものと、玉の緒を、
 絶ゆるものとも、知らずして。

二

戀ひを互ひの たましひと、
 我れはちぎらぬ くやしさを。

たましひならば、我が戀路、
 かゝる跡絶えは なかりけむ、
 たましひこそは、極みなく
 常世に絶えぬ ものならば。



(明治三十年三月作)

初 春 の 聲

一

荒野の末の うもれ草

うもれはてにし 身なれども、

また立ちかへる 君が代の

のどけき春の 初空を

いはふ心は おくるべき。

二

いざやあふがむ、朝日影。

紫にほふ 山の端の

八雲のとばり あけ初めて、

とよさかのぼる 君が代の

天つ初日ぞ、出でにける。

三

いざや、遊ばむ、わきもらよ。

緑ににほふ 君が代の

初春波の 池のべに、

幾萬代の 影見えて、

みどりの龜も 遊ぶなり。

四

限りもあらぬ 君が代の

初春鳥の 節きよく、

さへづる千代の 聲すなり。

いざや、うたはむ、わきもらよ。
うたひて合はさむ、千代の音を。

五

四方にまづけき 君が代の
初春風に 音清く

松も千代をば しらぶなり。

いざや、かなてむ、つま琴を。

かなて合はさむ、千代の聲。

六

ほのくくにほふ 君が代の

初春空に、あしたづの

つばさゆららに 今ぞ舞ふ。

いざや、舞ひなむ、わきもらよ。
舞ひて合はさむ、千代の舞。

七

うたへや、調べや、わきもらよ、

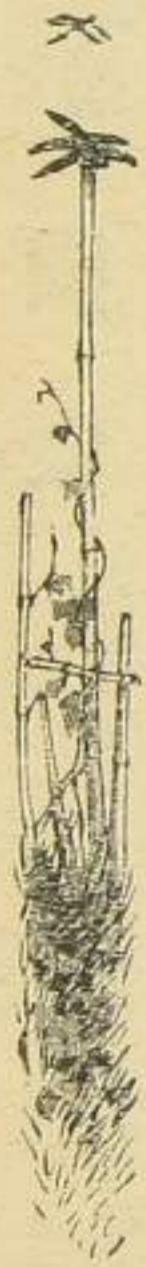
かやが軒端の ゆるぐまで。

舞へや、遊べや、わきもらよ、

かやが軒端の くづるるまで。

かやが軒端の くづるるまで。

(明治三十一年一月作)



わが國家

葦原の瑞穂の國は神ながら言あげせぬ國なりとは、萬葉の歌聖にきく所なるが、これ誠に我が美はしく優れたる國家の姿なり。神ながら言あげせずとは、すべて神のまゝにて、とやかくいひたえずといふ事にて、我が國家をなせる君臣は、徒らに理をとかず、強て論をかまへず、唯一片の至情一筋に天祖なる神々を崇拜して、天皇はこれによりて民を愛兒と撫で治められ、臣民はこれによりて、天皇を慈父とうやまひまつるは、我が古來の國風なり、實に我が美なる國風なり。はじめ天孫の此土に君臨せらるゝや、はやく此の國風を示せり。葦原の中つ國は我が子孫の王たるべき地なりとの天祖が御一言、皇孫はうけたまはりて、こゝに天降られ、臣民はうけたまはりて、うやまひ仕へたるや、

はやく、この國風を示せりといふべし。

富士の秀嶺の千秋高く、田兒の清浦の萬古蒼く、獨り東洋に美はしく聳え立ちて、古は日出の君子國としたはれ、今は天日の國光。世にうらやまるゝばかりなるめでたき皇國の姿よ、もとより天壤無窮の皇運の、遠く凡夫のはかり知るべからざる神徳の深きものあるによるや、明かなりといへども、思ふに、また、此の優れたる國風の力なるべし。我が君民の間の、理論の淺きを以てあつまらず、唯一片の感情の深きを以てあつまれる此の國風の力なるべし。一筋の至情によれるが故に、其の間、自から一家の親みの固きものあればなり、一家の力の強きものあればなり。

誠に、我が國家君民の間は、一家の至情を以て立てり、父子の至情を以て立てり。

元明天皇が御即位の時の大御詔に

遠つ皇祖の御代を始めて、天皇が御世々々、天つ日嗣と高御座にましまして、此の食國天の下を撫で玉ひ慈み玉ふ事は、事だつにあらざ。人の祖のおのが弱兒をやしなひ治す事の如く治めたまひ慈みたまひくる業ととも、神ながら念しめす。

天皇のこの土に君臨せらるゝ業は、人の親が弱兒を養ひ立つるがごとく、たゞ臣民をめで育つるにありとは、誠に歴代の天皇か神ながらの大御心にして、雨もる宮殿に民の富みをよるこばれ、玉體の御衣を脱ぎて、民の夜寒むを共にせられたる天皇の至情は、著くきこえたるものにして、秋の田のかりほの庵に、しほたるる民が衣手の苦しきを思ひかなしまれ、夜をさむみ闇のふすまのさゆるに、あちやの風を思ひやられ、照り曇り寒き暑きも時として民に心の安き間もなくおはす

など、實に民をおぼしやらるゝ至情は。

瓜はめば、子供おもほゆ。栗はめば、まして忍ばゆ。何處より來たりしものぞ。まながひにもとなかりて、やすいしなさぬ。

と、山上の憶良がうたひつくしたる我が愛兒を思ふの情も、たゞならぬなり。

世をさまり民やすかれと祈るこそわが身につきぬ願ひなりけれども、その元弘の天皇の御製は、やがて、歴代の御心とすべし。起臥にねんじたまふ所、朝夕におほしかけたまふ事、一もわが身の爲めにあらず、我が世の事にあらず。唯臣民の恙なかれ、國家の安かれとの御一念のみ。これを以て、天皇が唯一の御心とせられ、これを以て、天皇が唯一の事業とせらるゝなり。古來我が至尊には、萬骨を枯らして、遠く亞細亞の中原に、一將の名を立てたるアレキサンダーの如きはあはせぬど、

なかなかに、至尊の御一身をすて、國難にかはられ、萬民の患を救はむと祈りたまへる御方あり。百萬の國民をかけて、廣く大陸の中原に、一將の功名を博し得たるナポレオンの如きはおはせねど、なかくに、かよわき女人のお身を以て、三韓の異境にさへ征鞍をむけられ、永く國民が患を掃蕩したまへるお方あり。これ、實に我が皇室の大御心と、萬國のと異なる所にして、我が皇室の心がけたまふ所は、一家の榮華にあらず。一身の功名にあらず。唯、國民の幸福、國家の安泰を思ぼしめす至情のみ。この爲めには、萬里異境の征鞍の苦も辭したまはず。かしこき至尊の御一身をも惜みたまはざるなり。誠に有りがたくも尊きわが皇室の大御心ならずや。

上の至情や、斯の如くおはせり。而して、下の至情も、また、よくこれに伴へり。

天皇は神にしませば天雲の雷の上にいほりせるかも

持統天皇が雷岳に御遊したまへる時、萬葉の歌聖のよめる歌なり。なほ、現つ神わが天皇、あきつ神と大八洲しろしめすの語は、古人が數多いへる所なり。天皇は神なり現つ神なりとは、誠にわが臣民の觀念なり。神聖にして片言も犯すべからず、寸事も違ふべからざる至尊の御上と仰ぎまつれり。

かしのふによくすをつくりよくすにかみし大御酒、うまらにきこしもちをせ、まろが父。

吉野の國操人が大御酒を獻ぜる時の歌なり。君が民を弱兒と見たまふが如く、民は君を慈父としたひまつれり。かるかやの東の間も離るべからず、いそ松の常にやさしく仕ふべき至尊のおん上とせり、かくて天皇はかしこき神なり、天皇は尊き父なり、この天皇のみ爲めには、

けふよりはかへり見なくて大君のしこのみたてと出で立つわれ
は

(萬葉集二十の卷)

とて、もの知らぬ東夷だに、君の爲めとしいへば、馴れの故郷もかな
しき妻子も、をしき我が身の萬事も、すべて捨て、更に顧みず。

海ゆかば水づく屍。山ゆかば、草むすかばね。大君のへにこそ死
なめ、のどにはしなじ。

(萬葉集十八の卷)

天皇のみ爲めには、山の嶮きもいとはず、海の荒きもいとはず。天皇
のみ爲めには、身は藻屑とも朽つべく、野邊の露とも消ゆべく、天皇
のみ爲めには、悦んで水にも入らむ、笑うて火にも入らむ。天皇のみ
爲には、ある身を思はず、なき後をかへりみず。

ものゝふの臣の男は大君の委任まけのまにまきくとふものを

(萬葉集三の卷)

進退も唯君による。起居も唯君による。生死もまた唯君によるとは、
古の臣民が君に對せるの心なり。山上の憶良が

天へゆかば、汝がまにまく。地ならば、大王居ます。このてらす

日嗣の下は、天雲のむかぶすきはみ、谷嶼のさ渡るきはみ、きこ
しをす國のまほらぞ。かにかくに、ほしきまにまく。しかにはあ
らじか。

また曰く、

久方の天路は遠しなほほくくに家にかへりてなりをしまさね

これ、當時、儒學の論、佛教の説の、やうやく深く入り來て、世人、往
々昔日至情一片の人にあらずして、空論空理に馳するあるをかなしみ
て、これをいましめ諭したるものにて、この世には我が臣民の崇拜す
べき天皇のましませり。我々は唯天皇を崇拜して、そのみ心に従ひ、

そのみ言にまかせてつとめゆくべきなり。空論空理に馳せずして、各、わが家に在りて自家のなり(業)を、まめやかにつとむべし、これ、臣民の分のみと教へたるなり。憶良のいふ所や、誠に我が國臣民が固有の觀念なり。天皇を神とも父ともうやまひ崇拜して、一意これに隨ひ、専心これにつとめ、また他念なきは、誠に日本臣民が固有の美なる心ざしなり。而して、その心ざしの來る所や、理にあらざ、論にあらす。唯、神ながら言わけせぬ至情なり。なほ、古人が天皇に仕へ奉れる至情につきて、一二のおもしろき例をあぐれば、垂仁天皇の詔をうけたまはりて、幾多の星霜、萬里の波濤をふみて、遠く常世の絶域に、橘の木の実をたづね來て、帝の既にかくれましたおはせずときくかなしさに、今は生くといへども何の益かあらむとて、天皇の御陵にまゐり、橘の実をさへげまつり、つひに陵の前に慟哭してはてたりといふ田道

間守、また、おなじ天皇のみことごのまにまに、一鳥のあとを追ひありきて、北陸のはてまで至れりときく天の湯河板擧、さては、仁徳天皇の御代、天皇の詔を傳へむ爲めに、三日三夜、ふりつゞく雨中、山城の筒城の宮の前庭に立ち濡れて動かざりきといふ口子の臣など、今の世の智をのみ尊び理をのみ多く人々にきかせたらむには、愚とや笑はむ狂とやそしらむ。されど、我が古への臣民が、君につくすの至情は、實にかゝるばかりのものありしなり。なほ、わが臣民の純忠至誠の情は、萬葉集一部をよまば、幾多加ざりもあらぬものあるを知るべし。持統天皇が藤原の大宮造あらせられし時、

藤原の大宮つかへあれつくやをとめがもとはともしきろかも

とて、宮づくり仕へたる男が、朝夕天皇の御側去らず宮づかへしたてまつる宮女の身の上をうらやみたる情をくみ、また、日並皇子の薨

去あらせられし時、

天地と共に終へなむと思ひつゝつかへまつりし心たがひぬ

とて、舍人がよめる情ばかりをきくも、古への我が臣民が天皇を思ふの至情は、實に、彼の

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと祈る親の子のため

と、業平朝臣がうたひつくしたる親を思ふの情も、たゞならぬものあるにはあらずや、我が國家、君臣の至情や、斯の如し。我が國家は、父子もたゞならざる至情を以てなれり。而して理によるにあらず、論によるにあらず、唯、一片の自からなる情より出づ。我が國家の本や、誠に至情を以てなれるなり。

あはれ、このわが國家や、萬國に卓絶したる皇國の歴史は、實にこゝに本つけり。我が國家、古へに斯の如き本ありて、今日につきぬ光り

のためたきはあるなり。なほ、國家の行く末を思ふの士は、我が將來の國民に、この本を養ふ事をつとめざるべからず。やがて、將來の國民に、この至情を養ふことをつとめざるべからず。されど、今日歐洲の文明は、智識と理論とより成る。さるが故に、今日の文明の教育は、智識と理論との上のみ流れて、情の教育は全くよそに捨てられたる如し。されど、國家存立の本は、國民の至情にあり。智識理論は末なり。國民に至誠の情なくしては、學問如何に發達するも、國家の滅亡は逃るべからず。文明の智識、如何に進歩するも、國家の衰運はとゞむべからず、理論いかに發達するも、亡國の難はうちやぶるべからず。遠く希臘といひ、近く支那といひ、照々としてこれを教ふるの鑑ならずや。

退いて、我が皇國の歴史を見よ。蘇我横逆の誅滅は、鎌足等が至誠の情に助けられ、道鏡篡立の姦計は、全く清麻呂が至誠の情にやぶられ、四

百餘州をこぞりたる元寇を、筑紫の海上にみなごろしにして、弘安の國威をあげたるは、時宗等が至誠の情による所多く、七道をふみあらしたる北條の豺狼をつくして、建武中興の業をたてたるは、楠公が至誠の情により、亂麻と亂れたる應仁の人心を治めて、國家の衰運を挽回したるは、信長秀吉が至誠の情の力にて、徳川三百年跋扈せる武門の政弊をやぶりて、明治維新の盛朝をたてたるは、當時の尊王攘夷の志士が至誠の情、あづかりて力多きにあらざや、國歩艱難の時にあたりても、よくこれを扶翼して進ましむる者は、實に智にあらざ、理論にあらず、唯一片至誠の情のみ。累卵のあやふききはに當りても、よく國家を保護して、大山の安きにおくも、實に智にあらざ、理論にあらざ、唯一片至誠の情のみ。平時はいふまでもあらざるなり。國民の至情の力や、斯の如し。これを國家存立の本となすも、あたらずとせむや。こ

れを國家教育の本となすも、あたらずとせむや。

至誠や、國民たるの本なり。やがて、國家の本なり。國民たるものは、先づ至情なかるべからず。至情のめでたきありて、後に、智の深きも、求むべし。理論の高きも、望むべし。これ、眞に國家に功あるべき國民なり。古來國家をあやまれる國民を見よ。多くこの至情なき智者のみ。この情なき理論家のみ。至情や、國家の本なり。やがて、國民の教育の本たらざるべからず。至情の本を養ひて。而して智も磨かざるべからず。理論も教へざるべからず。これ、眞に國家に功あるべき國民をつくるの道なり。また、教育はもとよりにて、すべて、智識の琢磨と云ひ、學理の研究といひ、國家を本におかざるべからず。國家を忘れたる智識學理の研究は、余は望まざるなり。國家に用なければなり。しかも、國家をあやまるものなればなり。

けふよりはかへり見なくて大君のしこのみたてと出て立つわれ

我が國家を思ふの士よ。いかならむ道に立つも、いかならむ業につとむるも、我が國家の特色を忘るべからず。而して、我が國民固有の至情を忘るべからず。誠に富士の秀嶺の千秋高く、田子の清浦の萬古蒼く、東洋に屹立せるめでたき我が國の姿をつくれる力は、他にもなほさまじくの助けたる所あるべきも、最も遠く最も深き本源は、全く此の固有の特色にあればなり。

(明治三十二年作)



天長節の日にかける

今日は、十一月の三日、すめらみことのおれましたる日なり。眞澄の鏡の如く晴れたる空は、塵ばかりの雲も立ず、勾玉のまがりくねりたる八十の島々は、風なごみ波静かにて、山河も照りわたり、草木もにほひこもりたるさま、おん行末も、自から仰がれ奉るになむ。

此のごろ、ことさやく韓の夷は、遙におん惠のあつきに泣き、遠く、おん光りのめでたきををがみ、又、皇軍の旗風は、はやく、九連の山に震ひて、黄海の原を動かし、唐土の草木も靡きはてむとすといふも、思へば、何時か、わが天皇の御稜威の、宇宙の中にひろがり、我が天皇のみ徳りの、天地の間にあまねからむざるみまゐるしにこそなと思ひ奉るにつけて、草の庵りの露も、身にあまり、野末に生れたる身も、

世の有り難く、そいろなる涙を掃ひて、遙に、廣島の假宮の方をふし
 をがみ奉れば、又、み國のおん爲めに、御寢食も忘れさせたまひ民の
 爲めに、寒暑をいとはせ玉はず、玉なす御身を惜まず、錦なすみ心を
 いためたまふみ姿の、よそながら忍ばるゝも、かしこしや。

この石瓦の身は、惜しむべきならずとおぼえて、窓をはらひ、机をき
 よめて、終日、文かきくらせば、妹なる者二人り、外ざまより歸り來
 て、あな、兄君は何事をかしたまふ。天皇は、親しく、御旗を廣島へ進
 めさせられ、皇軍は、いさましく、もろこしの海原の波を志のぎて戦
 ふといふけふの日に、なほ、文など書み興じ玉ふか。筆もて戦せられ
 んどにかなど笑ふもにくし。

あながまや。汝等は、何處にか、さまよひありきたる。など、さは事も
 なげに、笑ひ興ずるぞ。をこのものやと制すれば、いづくにか徒らに

遊びありきて侍るべき。けふは、千代田のみ城を拜みにまゐり侍りた
 るなりと、上なるがいへば、次なるも、兄君は忘れ玉ひつるか。けふ
 は天長節に侍るものをといひて、互にほゝゑみて、かゝる尊き天皇の
 御代に生れ出でて、かゝるめでたき御國の民といはれ侍る身の、かゝ
 る御時に、悦ばぬ者こそをこなれといひて、どつとわろふ。

あはれ、いみじくもいへるもの哉、汝らも、そを知りてか。我も、う
 れしさに、今朝より、涙にむせびてありき。そを知りたる汝らが、わ
 が文かきつとむるを見て、時知らぬ人ぞと笑ふこそ、わが心には、さ
 ぞられぬ。さては、如何なる事をしてか、御代にむくい、天皇に盡くし
 奉らむと加思ひたる、きかまほしといへば、二人りはいかに思ひて
 か、容姿を改めぬ。

そは、わがせよ、よしや數ならぬきはに侍りとも、男兒にし侍らば、

皇軍の馬かひ童とも成り、み船の炭はこぶ奴ともなりてだに、仕へまつらむとおもへども、さる數にも及ばぬ女子の身の口をしさを、いかにせむ。せめては、傷める軍のため、藥をあたゝむる女子とも、包帯とやらいふ布まく女ともなりて、御國に報い奉らまほしう思ひ侍るになむ。何處に願ひ、誰に頼まば、そを許され侍らむ。兄君は、必ずや知ろしめしたまはむ、教へ玉へと、上なるがいへば、次なるも、今しも途すから、姉上とかたらひ侍りし事なりといふ。

あな、をかし。さばかりの心なればこそ、わが文かく業を、をかしと思ひつるも、ことわりなりけれ。いで、御國に生れつるからには、天皇に盡くし奉らむま心は、誰れも彼れも、おなじなれど、人々おのが身のほどによりて、仕へまつらむ道に、けぢめあるものなり。まづ、男女の間にながひあり。遠つ御祖^{みそや}が、民の貢を定め玉ひけるにも、男に

は弓弭、女子には手末と仰せ玉ひしふる事をも思ひみよ。男には、男たる務めあり。女子には、女子たる業ありと、教へさせたまひたる大御心を思ひ見よ。汝らは、女子ぞ。女子といふ事な忘れそといへば、さばかりの事しらでやと思ふらむ、次ぎなるは、姉の方うち見て、ほゝゑむ。

さて、男は、男子の中、女子は、女子の中にて、又いろ／＼の務めにけぢめあり。太刀劍、手に取りもちて、御國を守り、あだを討つも、天皇に仕へまつる者の業なれば、文机にうちむかひて、天皇の御詔をうけ、下なる民を教ふるも、又御國に仕へまつる者の務めなり。言の葉の色に心を染め、人の心をやはらげむと思ふ人も、あきなひの業に、身をやつし、黄金をあつめむとする人も、おなじく、御國に、天皇に仕へまつる民なり。唯、其の際により、其の品異なるのみなり。汝等が

常に、いみじき大人ともてはやす眞淵宣長などいふ翁が、古への學びを起して、世の人の心を正したるも、又は、維新の折りの大丈夫が、錦旗をふりかざして、皇室の御威を、天が下に知らしめたるも、共に赤心を盡くしたる秋津島山のやまと男子のほまれなり。いづれかいさをあり、いづれかいさをなしといふべき。さればぞや、妹よ、平壤の彈雨を冒し、渤海の怒浪を凌ぎて、北京に皇國の錦旗を建て、御威を四海にふるはせむとたけぶ大丈夫も、又、積年の螢雪に骨をいたため、萬卷の書間に思ひを焦して、國民の心に至誠の花を咲かせ、御徳りを萬世に輝かさむとつとむる文人も、彼方は太刀もて、此方は文筆もて、等しく、天皇につかへ奉らむとするものなり。われ、文をすてて、太刀はかば、わが勤めを忘れたる者。かれ、太刀すて、文取らば、彼れが勤めをすてたる者なり。さはいふも、そは時にこそよれ、ものにこそあるな

れ。われも、馬前に參り仕へむ事あらば、いかでか人に遅れむ。

汝らは女子なり。太刀取り、弓づるはるは、非常の事。常の業にはあらず。皇軍に隨ひゆきて、武士のいたづきを慰めむといふも、さすがに眞心はこもれば、われ、強ちに悪しとはいはじ。さはいへ、汝らばかりのかよわき者が、さる業願ひたらむとて、いかでか許さるべき。よしやうけたまはりたりとて、徒らに皇軍の煩ひとなる事や多からむ。あながちにさる業せずとも、汝が品にかなひて、天皇につかへ奉る道の無しとにもあらざるべしといへば、妹なるは唯こといらへ、次なるもきかんと思ふらむ、身じろきして膝うちすゝめたり。

かしこくも、天皇親ら錦の大旗を進め玉ふときして、都には、送り奉らざる人なく、鄙には、迎へ奉らざる者なく、皇軍、外國にむかへば、動かぬ山河もなく、靡かぬ草木もあらぬめでたくも有り難き御世のみ

力のかぎり討ちいづる、
彈丸も残らず成りにけり。

その十二

「駒の腹帯引きしめて、
今こそぬけや、日本刀、
余に續けどさし招き、
一鞭あて、踊り入れば、
いづれも同じ日本男の
おくれず越ゆる敵の壘。

その十三

「さすが嶮しき堡壘さへ、
今は恠へず打ち破れ、

くづれ立ちたる敵の群れ。
大同江の岸たかく
散るは、木の葉か、白波か、
げにおもしろの勝戦さ。

その十四

「諸手の軍打ちかちて、
平壤城の朝かぜに、
なびくも嬉し、日の御旗。
はるかに君を仰がむと、
下り立つ袖に湧く血汐、
はじめておぼゆ、我が重傷。

その十五

「いはへや、美佐緒、夫の爲め。
うたへや、雪も、父のため。

天皇に仕ふる大丈夫の
今日こそ花は咲きにけれ。
散るとて何か惜しむべき。
あかき心を、天皇知れば。

その十六

「ふたゝび立たぬ我が痛手
やがて形見は届きなむ。
はきたる太刀は折れたれど、
武雄のもとに送りてよ。
『父が此の世に遺すべき

教へは是れと』言づてい。

その十七

「いはでもしるき事ながら、
み國のためと散る花を
惜しむは、やがて、天皇の仇。
天皇の御仇は我がかたき。
妻とは思はじ、歎きなば。
我が子と爲さじ、泣きもせば。」

その十八

母がきかす父の書簡、
墨さへ清き父の書簡、
雪子は胸にかきいただき、

「泣かじ、父上、余は泣かじ。
子とおぼしてよ、何時までも。
母さま泣きてたまはるな」

その十九

「あが子、いしくも、いひにたり。
かなたの父のきかれなば、
さこそよろこびたまふらめ。
みかどのみためや國のため、
ちる武士の花のいろ、
泣きて妻女の何かせむ。」

その二十

かたむけなくも大君の

あつき言葉を添へられて、
やがて形見は着きにけり。
折れたる太刀に血の肌衣、
天皇に盡くし、赤心の
あかき色香ぞ忍ばるし。

その二十一

天皇の恵の露霜に
薫のこして散る男兒、
庭の教を、おきふしに
守りたがへぬ其の妻女。
これや、誠に秋津しま。
やまと撫子、ちもしろや。

す み れ

「たれに ゆかりの いろにいで、

なれは 惹むらむ 花すみれ

かくも やさしく うれしげに」

「あらき あらしを やはらげし

あまつ 日がげの めぐみをは

なれや よろこぶ ものならむ」

「もゆる ひかりの はげしさに

やがて 枯れなむ わが身なり

なにし うれしき 日かげかは」

「むすぶ 氷りを ふきとぎし

かぜの やさしき なさけをば

さては よろこぶ なれならむ」

「あなむ こちかぜ みだれ来て

まなく しをれむ わが身なり

たれか 風ゆゑ ほゝえまむ」

「ゆふべ ゆふべに かよふなる

つゆの しづくに ほだされて

さては なれはも 粧るらむ」

「露の くやしき おきふしの

しげむ ものから しぼむ身を

などか つゆゆゑ 粧るべき」

「舞ふも やさしき 春の野の

あきつ み神の すめらゆゑ
 かくは 悉むなれ すみれこそ



蝴蝶の 袖の なつかしみ

さては 媚ひるか 花すみれ

「ものゝ 数には あらぬども

あだし いろには そまぬ身を

あはれ くやしき ことないひそ

「ゆかり あやしき むらさきの

たゞに そむべき いろかゝは

さては きかなむ ながゆかり

「われを 此の世に つくりたる

あめに ますなる み神ゆゑ

かくは 悉むなれ すみれこそ

「われに 此の野を かしたまふ

さ 夜 時 雨

(一)

やよや、忍ぶの 村時雨、
さな音たてそ、みだれ来て。
ひとりぬる夜の さ夜枕、
さらでも淋しき ねざめなり。

(二)

いづれの灘に 漕ぎくれて、
人はまくらむ、浪枕。
いたくな荒れそ、沖つ風。
今宵舟路の 人ぞある。

(三)

今の夢路に あひにたる
おぼつかなげの 一葉舟、
さ霧も波も たちまよふ
青海原の 末遠く。

(四)

わが思ふ人の 舟にやと
よぶまもあらず 夢さめて、
影もといめず なりにたる
舟の行方の おぼつかな。

(五)

あな心なの 村時雨、

またも軒端に 亂れ來て。
しのにしをるゝ 玉の緒の、
今や絶えゆく 心地する。

(六)

絶えでよ、あはれ、玉の緒は、
行きにし人の 立ちかへり、
ふる屋の時雨、今一度
おなじ枕に きくまでは。



栗

賣

上の卷

何とよぶらむ、名も知らず、おぼつかなげにさ霧のみ立ち迷ふ夕山が
くれに、日は何時しか落ちはてし、下くらき谷川の、たぎち流るゝ音
は、さながら百鬼萬鬼の、牙を合はせて噛み合ひ、罵りあふかときか
れて、踏む足もとの、自らわなゝかるゝに、むらゝと茂る岸の荆棘
の、此處彼處やまばらに破れたる隙より、底の岩根に亂れ狂ふ浪ほ
の、ちらゝと見えて、白うきらめく影は、それや鬼のもすらむ火か
と覺えて、幾度か身の毛もよだつに、吹きまく瀧のしぶき冷やかに面
を掃ふ山風は、目に見ぬ者の、手もて、ひたゝとかい撫るにやとあ
やしまれ、掃ふとすれど、身に染みて、心も消えゆくばかりものすこ

く、近しときけど、知らぬ山路、なほいかばかり行かばや、温泉はあ
らむ、宿はあらむ。これより幾重の峠か越ゆべき、幾瀬の谷かわたる
べき、如何なる出湯か、たよりよからむ。如何なる宿か、心安からむ。
心安けき宿なからむにはなど、思ひつゞくれば、一向に心細くのみ成
りまさり、如何なれば、かゝるうらすごきわたりを、楽しく長閑けき
ものとは思ひけむ。思ひて、何なれば、かかる旅には出で立ちけむ、
何に出で立つ心には成りにけむ。くやしきよとさへ思はれて、今朝心
地よげに惜しげもなく立ち出でたる都の空のみ、見かへられて、其方
を志す雲の行方を、うらやむにはあらねど、つくづくとうちながめて
たゞすみたる山野岑雄。多年書窓の呻吟に亂れはてたる脳髓を治めむ
とて、はるくと思ひ立ちたる鹽原の出湯路。便りよき都にのみ生ひ
長ちたる身の、たづきとほしき鄙のさまを知らず。人車をも馬をも雇

九八二 賣 栗

ひ遅れて、行けど行けど行けど木蔭見えぬ奈須野の草原、燃るが如き
暑さに蒸し立てられたる上に、まだ踏みも見ぬ峻しき山路の夜風、夕
霧にあてられたるなれば、さらぬだに病みたる腦の悩みは、いふばか
りあらず。來し方を見かへりて、志ばし佇立むとせしほどに、重げに
煩はしき頭の、とみに重げに成り行き、大岩もて壓しつけらるゝやう
におぼえて、はては、立ちも怵へかねて、仆れむとするを、わづかに
側の岩に取りすがりて、辛くも支へたる危さ、都の母の夢路や、如何
ならむ。折りしも、大やかなる犬を前に立て、足早に行き過ぐる人
影。闇夜なれども、小やかなる籠をかけたる肩の、さすがに柔和しげ
に、裾短かに着なしたる袂の、しかすがに、志なやかげに見ゆるは、
定めて、此の邊りの草の屋に、あたら花を埋れながらに散らすとや、
父母が折りふしのかこちの種子ならむ。

取りすがりたる岩ほをつたふ清水に、かゝるともなく自ら頭を冷やさ
れて、やし心靜かに落ち着きたる岑雄は、行き過ぐる里の子の姿に、よ
き案内と思へば、呼びかけつゝ追ひつきて、出湯あらむわたりを尋
ぬれば、少女は氣輕げに應答へて、「出湯は何れのか」と問ふ。「さな
り、頭の病みて煩はしければ、長閑に心安からむわたりをこそ願ふな
れど、鹽原は今日初めて分け入る山路、路だに、かうたどくしけれ
ば、何處のわたりにも如何なる出湯あらむ、如何なる出湯に如何ならむ宿
あらむとも知らず。福波戸にもやと思ひては來したれど、途にてきけ
ば、昨日今日いと賑へば、靜かなどとは思ひもよらずとか。さにや」
と問へば、「ほんにぞ、福波戸などは、何れの宿も、溢るゝばかりの客
人にて、昨日も折角來て門より斷られし客人の、ちつどの事にあらざ
とか。此の頃靜かなる所と云へば、近くは、先づ古町あたりならば」

と云ふに、「其處は山蒼く水清うてか、景色は美うてか」と問へば、「あ
な景色とか、景色にては鹽の湯こそなれど、そこは殊更人さまで埋れ
てに。景色など長閑に眺むべき窓も、ほとほと侍るまじ。大かたの所
は、きのふ今日賑はぬはあらじとか」。「さては、靜かならむ宿は、所
詮、え求めまじや、さる事ときかは、他處の山河にこそ、靜けきわた
りもありけむものを」と、おぼえず嘆息すれば、始終先に立ちたる少
女、はじめてふり返り見、いと氣の毒げなるけしきにて、「數ある鹽原
の出湯なり、尋ねめぐらば、靜かならむわたりも、無きことは侍るま
じ。なれど、今宵とみには如何ならむ。古町にてもとあらば、志か
くいふ家あり。廣やかにあらねど、裏には河をもむすぶべく、山
をも望むべし。さまではあらずとも、騒がしきまでには無からむ。腦
を病みたまふ方ときくに、他所ならずいとほしく思ひまらせば、教

へまゐらすなり。もしや宿り玉はむとおぼさば、行きて見られよ。栗賣りの女子に聞きたりと告げられなば、心安う留め侍らむ。此處が福波戸に侍る。これより路も大事なし。二十町ばかり行き玉は、蓬萊橋といふがあり。それ渡り玉は、古町なり。古町に入りて、まか〜と尋ねたまは、容易く知れ侍らむ。われ案内せばよかれど、今朝栗賣りたる代の、此處彼處に預けあれば、それ取る間もあらむに、わがいふやうに行き玉は、大事なからむ。われも歸り路なり。後より尋ね申さむ。此の道を何處までも」と、幾度か教へ、さらばと別れむとしたりが、また立ちとまり、「あな心づかざりき、これ伴れたまへ」と云ひつゝ、側去らず引き俱したる犬の頭を、三度四度かいなで、「まるや、此の方を、老婆の所へ案内してまゐらせよ。此の方を、わかりてか、老婆の所へ、のう、丸や、疾く〜」と命ずれば、犬はよく心得

たるけしきにて、二聲三聲うちなきて、尾をうちふり〜、はや先に立つに、「丸がよく知りたれば、これ伴れ玉は、大事なし。さらば、臆て後より」とて、立ち別れゆく少女に、岑雄は、忝けなき情けを、幾度か悦び云ひて、犬の導くまゝに従ひ行けば、右左に立ち並びたる旅籠屋の、何れも軒とよむばかりの人のけはひ。けうときだみ聲にあはする怪しき調べさへ、此處彼處響きわたり、きく儘に、胸わらくおぼゆる雑踏。かくては、所詮、わが病を治め得べき所は思ひもよらじ。少女が教へ呉れたるわたりも、大かたは推し慮られ、おぼつかなくおぼゆれど、さはいへ、岑雄、今宵、此の闇路、さりどて何處へさして行くべき空もあるにあらず。まかも、折角の少女が厚意、断らずして去ぬべくにもあらねば、今宵一夜は、とてもかくてもなど思ひたどりつゝ行くほどに、何時しか人の家居を離れ、またもや奥がわかぬ岩

のむら山、底知れぬ谷の淵瀬、見るもおぼつかなき岸嶮路の細路にか
れば、またも聞きなれぬ松の夕風、岩きる水の音、ものすごからぬ
にあらぬも、人山なす宿の煩はしきけしきに、さらでも熱したる頭腦
の、一際燃るばかりになりたる頭には、冷やかに涼しげに心地よくお
ぼゆるに、一度は所詮すまじく思ひ捨てたる山川の、また幾分か頼
母しき岸もある心地して、犬の行くまゝに、幾隈か山路を折れゆけ
ば、またもや、一むらの家居に出づれば、かゝらずもの賑ひは、福波
戸ときゝつるにも變らず。きく儘に、またも心地あしくなれば、目も
むけず、耳も塞ぐやうにして、一向に歩めば、とある橋に出でたり。
蓬莱橋にもやと思ひつゝ、渡りはつれば、犬はとみに急ぐ如きけしき
にて、駈けては待ち、待ちては駈け出づるに、岑雄も、走るがやうに
して追ひゆけば、犬は、とある小路を入りて、走り留まりたるは、奥ま

りたる家の門口。犬は頻りに飛びめぐりつゝ、鳴き立つるは、主人を
呼ぶ心にやあらむ。

さては此處なるかと、岑雄の立ち留まる間もあらせず、家には、常き
くなれたる聲を知りてか、「やは九か、お静坊か」と、年よりたる女の
聲にて、雨戸をひきあけて立ち迎ふる人影、犬は裾に走りすがり、ま
たわが方を振りかへりふりかへりつゝ、老婆の面を見あげながらに、
いと低く聲立つるは、紹介する心ならむ。岑雄も立ちよりて、會釋す
れば、老女はさしのぞくやうにして、「露ぞ見知らぬ人」といぶかしげな
るけしき。げに知らぬ都の者、志かゝの便りにて、栗賣の女子に教
へられて參れる者。いとなめなる願ぎことには候へど、お家の片隅に
なりとも、今宵は主人のおん情けをこそ」ときこゆれば、「その栗賣り
の女子とは、お静坊にてか」と、なほ残る老女が疑念のをかしき問ひ

に、岑雄はおぼえずうち笑みて、静子と呼ばれてやら、何といはれてやらん、名は承ざりしが、此の犬を伴れられたる少女子、栗賣る者と慥に云はれしが」といふに、老女もうち笑ひて、「ホンによ、をかしかことを、さては、たしかにお静坊の教へまゐらせたるにて侍る」とて、又何がをかしかならむ、から／＼とうち笑ひて、「閑静には侍らぬど、むさぐるしきを厭はれずば、上り玉へ。心置かるゝ宿には侍らぬば、いざ／＼」と促すまゝ、岑雄は、「さては、心安ううけひき玉ひて忝し」と、禮儀述べつゝ、肩にせる革包と共に腰を下して、靴の紐とさか／＼れば、終始うちまもり居たる犬は、尾をふりつゝ、またもや三聲二聲うちなきさま、わが務め終れりといはまほしきけしきにて、そがまゝ表の方へ駈け出で、何處ともなく走り去りたり。

岑雄が案内せられたるは、母屋より庭を隔て、小さやかに造られた

る離れ家なり。床の間も附けられ、違棚も添へられたれど、唯、山松の曲りくねれるを、無造作に打ちつけちらしたるのみにて、戸棚の襖には、色取られたる石盤繪など張りちらしたる、見る目あやしけれど、椽は水音清きさいら川の岸にのぞみ、むかひなる山は、軒端近くうち見ゆるに、さながら山家の畫中の人とも成れる心地して、思ひの外なるをかしかわたりにこそ見るに、むら／＼としたる心の、はじめて落ち着きておぼゆるも、うれし。

老女に教へられて、近き邊りの出湯を浴び、河原に水むすびなどして歸れば、夕饗もはや整へられ、「客人を待つ宿にもあらねば、不束なる饗應のほど容るさせ玉へ」と取り出づる膳部。岑雄は、何よりも厚き志を、まづ悦びきこえて、かゝるわたらひに馴れぬものからの途中の失錯などより、四年三歳以前の人傳にきゝしよりは今更の賑ひなど、驚

き語れば、老女も、此の年來おぼえぬ繁昌の驚きより、いつしか説き
 轉る出湯の功能、山河の風景など、夕饗のはてしも知らで語り續くる
 をき、興ずる折りから、門のべに鳴くは、き、おぼえたる丸の聲。
 きくまゝに、老女は「丸か、お静坊か、歸りてか。」と、とつかは立ち
 迎へたるが、犬の叫ぶ聲は、なほ五聲四聲したるが、やがて、聞えずな
 りたるは、また、何地へか走り去りしならむ。
 老女は、や、心元なげにて、立ちかへり來て、「別れたまへるは何方に
 て、何といふ宿なりし」など問ふ。「さればなり、福波戸と云ふことも、
 そのお静どのとやらむが、つげ給へるにて、知れるのみ何といふらむ、
 宿の名などは、知るよしも侍らず。栗賣りたる代を此所彼所に集めて
 といはれたれば、それゆゑに手間取られてならむ」との峯雄の答へ
 を、もの足らぬやうなるけしきにて、唯獨言のやうに、「毎時よりも歸

りの遅ければ」といひつゝ、膳部を取りかたづけ、「夜のものは鹿末な
 れど、戸棚の中に納めあれば、何時にても心のまゝに」などいひ捨て
 立ち去りたるが、また訪れも來ず。
 霧ふかく立ちこめて、夜風いと冷やかに、衣もさむしろも濕りゆけば、
 引き籠りて燈の下に獨りむかへば、頭はいと重くなりておぼえ、身う
 ちも寒けたちて、心地何となう、おぼつかなく覺ゆるに、はやく枕に
 つけば、馴ぬ旅路の疲れに、いつしか寝入りて、しばしたどる夢路、
 山路の苔に足踏みさらかし、したゝかに頭を岩にうちつけ、起きむ起
 きむともがけども、もがけども、え起きかぬると夢見て、目覺むれば、
 燈火暗く、夜はいつしか更けて、老女も既に眠りしか、母屋の方も静
 りかへりて、唯近く岩根をたゞく早川の響にあはせて、遠く何處とも
 なく通ふ瀧の系のしらべのみぞすみわたる。頭の痛み烈しく、え擡げ

ねば、枕邊の時計引き寄せて數ふるに、はや、ま夜中もたけて、一時にも程近し。さては、栗賣りの子も、はや歸へれるならむ。待ちつけても、厚意をば呉れ、悦びいふべかりしものを、心のまゝに眠りかけて、立ち寄れるをも知らざりし心なきを、鄙の少女に笑はれけんこそ、あさましけれなど思ひつゝくる折りしも、門口高く例の丸の聲して、あわたしげに訪づる、女の聲、「老婆御、もはや寢たまひてか。あな苦し、今戻りしぞ、老婆御、あなくるし」と呼ぶ聲に、老女は未だ熟睡せでありしが。耳さどく聞きつけ、「お静坊か、案じてぞ、如何してぞ、いと遅く」など答へつゝ、雨戸引き開くる音す。「老婆御、湯にても、水にてもたまはれ。あな苦し、玉屋のお客に強られて、老婆御、水を、あなくるし、水を」とよべば、「いま汲みてぞ、お前、ひどう苦しげなる、如何してか。さはさ湯ぞ。もはや冷えてぞ」と、老女の聲。

の聲。

聽て、少女は、やゝ落ちつきたるけしきにて、「老婆御、されば、宵に宿求めに若人の見えてか。どめさせ玉ひてか。さては、安心しぬ。疾く後よりとおもふに、此の頃玉屋の奥座敷なる東京の客人が、いかに思ひてならむ、そちが來れば必ず寄せよとて、晝より待たるゝどの女中の言葉に誘はれてゆけば、番頭女中などあつめての酒宴最中。よく來てぞ、残りたるあらば、栗も皆、餅もみな買はむ。挽物細工もいかなるものかある。珍らしきがあらば買はむとて、彼れよ此れよと思ひがけなき商ひに、今日は父が笑顔も見られてと悦びて、暇取らんとすれば、折りから、店に訪れたる猫太夫の聲。よき者こそ來たれ、そちが慰みに義太夫きかせむとて、呼びあげらるゝに、妾が爲めにならば、おかせて玉へ。少し心急がるゝ事あればといへば、そちの爲めぞ、そ

ちがきかざれば止めむとて、折角有難く召されて、頭をさへ下げたる猫太夫を其の儘歸さんとするれば、見知らぬ人にもあらず、耻見せむがいとほしさに、さらばとて、きかむとすれば、彼れも語れ、此れもきけとて、いつ迄も果ては無く、はては、え飲まずといふ酒を、是非にとて押さへて、無理に四五杯まで、酒狂の上と思へど餘のり狼藉に泳へかねて、なほ去なせむと相撲を拂ひ仆して、僅に駈けぬけては來にたるにぞ。のう老婆御、をかしき客人もあるものならずや。苦しき目には遇ひにたり。かゝる賤しき稼業するからに、ようなき人にも侮らるゝくやしさを」と、未は涙にむせぶかと思ふばかり、低く沈みてきこえしが、老女は、ほゝとうち笑みて、「いかでか、させる心ありてにあらむ。其方が若草のうらわかき袖の、色も香もやつして、いそしむさまのいたいけさに、其方を慰めむとぞ。悪う思ふものに非ず。はや

夜中も過ぎたり、疾く歸りて息みぬ。老婆が途まで送りてえさせむ。父御もさつきに案じて、此處まで見えたり」といへば、少女は、何に心や打たれけむ。いたく激したるごとく、されど調はいと沈みて、「老婆御、ホンにか。定めて恚りてなりしか」と、調は一きは沈みて、「さらば、老婆御、もはや去ぬなり。丸あれば、淋しくもなし。送るなど、さるやうはあらし。構へて、ようなし。さらば、老婆御、明日また」と、老女の是非に送らむといふを、強て辭みて、「丸や丸と」呼び立てながらに、歸り行かむとしたるが、また引きかへし來て、「老婆よ、彼の若人を勞りてよ。腦を病ひてといふが外ならずいとほしければ、老婆御を頼みまゐらすなり」といへば、「な氣づかいぞ。老いては、物事の煩はしけれど、其方がたのみとあらば、老婆は辭みはせじ、厭ひはせじ。慥に頼まれてぞ。な氣づかいぞ。それよりは、夜路をよく心せ

よ」どの老女が注意を、大事なしと軽くうちけして、またも「丸や丸や」とよび立てつゝ、走り去りたるけしき。

岑雄は、幾度か嬉れしかりける志を、よろこびいひに立たむとしたるが、頭の痛み一方ならで、枕を上ぐべくもあらず。なまじなるわざして、わが苦痛を知らするやうの事して、此の上にも思はせむも心苦しければ、明日を待ちてと思ひといまりて、そがまゝ、枕ながらにうちきゝたる少女が言葉のはしく、等閑の物語りなれど、よしありげに、耳とまる節々なきにあらず。さらぬだに、病み煩はしき脳髓、益なき物思ひに耽る事やあると、自ら制すれど、とゞむれど、少女が「いやしき稼業するからに侮らるゝがくやしきよ」と、いと沈みてきこえしよりに、父とききて甚く心をうたれたらむけしき、殊に「頭の病きを聞かまゝに外ならずいとほしくも思ふなり」とて、まかも引きかへして

まで、かへすゝ老女に頼みきこえたるなどの節々は、いとあやしく思ひつゞけられて、岑雄は、暫時の間は心に描きては消し、消しては描く少女が風姿境遇。

中の巻

ありし栗賣りの少女も、何時しかうち交りて、岑雄が故郷のふる屋のさむしろに、馴れの人々聚ひ居て、互に語り合ふと見たるに、何時しか、その人々の影は消えて、獨りも見えずなりたるに、驚きて、呼び立てむとして、目さむれば、歸る故郷の夢路の間に、夜ははやく明けはなれて、假寐の床近うさし入る日影、いと静かなり。

頭の痛みも、いと軽く覺ゆれば、起き出でうちわたすに、さのみ高くはあらねど、向ひなる山の、木立いと深く茂りて、折節朝日に匂ふ緑の色、目もさむる美はしさなるに、裾を流るゝ谷川、深くはあらねど、

底のさゝれも數へむばかり、清う澄み亘りて、吹くともなき朝風に、さゝらきゆく影、身にしむ涼しさ。見るまゝに、心地も、とみに涼しくなりゆくに、いどうれしくて、彼方此方とうちわたしてあれば、駒にま草つみて、里の子の山路を下る姿など、木の間かくれに見え隠れする景色、いふばかりなくゆかし。

岑雄は、我れをうち忘れて、つくづくと眺めたる耳もとに、強く響くは、よべより幾度か聞き覺えたる丸の聲なり。耳かたぶくる間もあらせず、やがて、母屋の方に「お静坊」かと迎ふる老女の聲につゞきて、「老婆さま、昨夕は夜更にいらぬもの騒かせさせて」と謝ふる少女が詞を、軽くうち消して、「何に、さる事を、それよりは、お主は最早今朝は心地しづまりてか。昨夕はいと苦しげに見えたるが。さては、大事なくてよかりき。歸り遅ければ、如何ばかりか叱られつらむ。心もと

七〇三 賣 栗

なく覺ゆれば、今朝尋ねて見むと、今も今思ひたる所なりしを。無事にて斯う見るからは、心落ち着ぬ」と悦ぶ老女が聲す。少女は、其情けを悦びきこえて、「ホンに、昨夜は、いたいの思はせて、濟まぬ事してに、老婆さま、悪う思はでよ、さばかり苦しかりける心地の、今朝は名残りだもなく、いと心地よきのみか、老婆さま、昨夜あれより歸りたるに、何處に夜更くるも知らず遊びまはりてぞと、門より待ちつけて罵り叱られたれど、平常になき得分を持ちかへりたれば、さまでの叱言も、老婆さま、昨夜は聞かずてやみしよ。しかも、今日は近くをのみめぐりて、疾く歸りて休めとまでいひて、ほゝとうち笑み、「さても、老婆さま、彼の客人は如何におはしてか」と問へば、「なほ今朝はうまいしておはす」と答ふる聲す。

岑雄は、殊更に襖の戸高く開け立て、はや起き出でたるけはひ知らず

れば、「御目ざめにてか」といひつゝ、やがて音なふ老女に伴れて、共に訪づれたる栗賣りの少女。岑雄は立ち迎ふるやうにして、「今がたお聲のきこえたれば、此方より参りて、昨夜の厚意を謝しまゐらせむと思ひ居たるに。さても、お事が有り難き情け故に、かう心に適へる宿りを求めて、昨夜も心安う、終夜うまいしたる嬉しさよ」など悦びきこゆれば、「何に、さる禮を。うまいしたまへるとききて、われもいと嬉れし。さても、昨夜は、何處の出湯あびたまひてか。腦の病ひには、畑下戸の鳩の湯といふこそよけれ。こゝより僅に三町ばかり、遠くもあらず。昨夜此處へ來たまへる道を、左りの谷に下れば、川原の端なる湯なり。我もこれよりその渡りへ参るなれば、案内してまゐらせむ」として、「さまででは」とて辭めば、「今日は心急がるゝ營みもあらぬば」とて、岑雄が朝食はつるをさへに待ちて、伴れ立ち、途すがらも、よそ

の物語りは無くて、唯頻りに岑雄が頭の腦みを氣遣ふ様子にて、「腦の病ひばかり、悲しきはなし。必ずと頼むべき薬もあらずで。唯靜かなるわたりに、自らなる風物をたよるべきなれど、されど、もの思ひといふ事、腦にはいと悪きなり。すべて物思ひを捨て玉ふが、此の上なし」など語りて、「鳩の出湯浴びたまはゞ、布をしたして、幾度となく頭にもかけたまへ。さするがいと効驗ありといへば」とさへ教へて、出湯の邊りまで案内して、別れ行く。

それよりは、日毎の營みの行き歸り、朝には必ず道の便りに訪れて行かぬ日なく、夕にも心急がるゝ家路の脚を留めて歸らぬ日は稀れなり。されど、させる物語りなどあるにあらず。たゞ岑雄が腦の病きを、「昨夜は如何に、今日は如何に」と、毎時氣遣ひ問ふならでは、折り節、言の便りに、都の事、なつかしげにて、尋ぬるのみ、いわけなき程は

都に育ちしものなりとて。

朝夕に氣づかひ問ふのみならず、常にも心にかけてありとおぼしく、「今日しかむかの客人にあひてきくに、都にしかくといふよき薬ありとか。定めて最早飲みおぼえ玉ひてならむか。また、さる國よりの客人の教へには、その國のさる里のさる家に、さる薬ありといふ。鄙の物のいと覺束なけれど、尋ねて試み玉ひては如何ならむ」など、心を添ふることも、しばしに、そればかりにても、たいならぬ嬉れしき志なるに、一日雨ふり風も吹きまぜて、いともすこく覺ゆるまでなる中を、厭はずに濡れて尋ね來たれる少女。「此の荒しの中を」と、老婆も驚きて問へば、「兼ねて腦の病ひによき草あれば、今日まで日毎に行きかへる途次、心にかけてたれど、いとたまさかにのみ見る草なれば、今日まで見あたらず。兼ねて見たることもあるを心あてに、もし

やと宮島の田のあせあせを尋ねありきて、やうやくに三株ばかり尋ね得たれば、嬉れしさに明日ともいはず、持ち來にたり。あやしげなる草なれど、志のほどをこそ飲み玉へ。教へたる人も、飲みたる人もおぼえあるなれば、毒あるやうの草には侍らねば」と、きくより驚くばかりなる人の志。病の苦しみを思ひやりての情けとて、これまでは露ばかりの縁も床りもあらぬ人の病きを、斯くまでに思ひやりての情け。現の此の世のこととして、怪しきまでに珍らしくも覺えざるを得ず。をりく、岑雄の言葉にもうち出で、ためしなき情けを悦び、「この病には、よくくふかき同情を有ちたまふものにや」といふかゝることあれど、少女は「異なる故よしあるにあらず。腦を病み玉ふときしては、何となういとほしく覺えて、他事に思はれぬが、げに我心の病ひに侍る」とばかりいうて、微笑むのみ。老女にも幾度かあやしみ

問へば、何故にや、これも深く包める氣色にて、明らかに語らねど、
 「此の少女の母なる人も、此の腦をなやみて果敢なくなりたり」とい
 ふ事ばかりは、少女が二度まで、その藥草を持ち來れる時に、老女が
 僅にもらししにて知りぬ。これを、初めの夜にきゝかすめたる詞の節
 々に思ひ合はせて考ふれば、此の頃岑雄が心の中に書き得る小女が身
 の上。もとは都わたりに住み榮えたるその父母の、世に佗びて、かゝ
 る山里にまで移り來れるが、その母なるが年月の物思ひに腦を病ひて
 果敢なくなりしより、今は情けなき繼母などの手にかゝり、さて意氣
 地なき父は、新しき妻の心まかせに、おなじ邪慳の筈を振りて、かく
 日毎の勞働に、情なくも此の少女を追ひ遣ふならむ。されば、道理り
 や、少女が心には、さこそ生みの母の戀しからめ。亡き母の悲しから
 め。戀しく悲しく、やる方なきからに、其母とおなじ病きときゝては、

いとほしくも思ふならむなど、思ひ書けば、少女が此の日來の厚情、
 たいに珍らしきものにおもひ悦びたるものゝ、今は何となう哀れに痛
 はしき心地も添はり、少女が日毎尋ねて「病を如何に」と氣づかひ問
 ふ度に、岑雄は、また、その情けを悦ぶと共に、少女の心の中のさこ
 そ母を思ひ悲しみてならめと思ひやられて、志ばしながらも、其が心
 の憂ひをば忘れしめんとつとむるやうになりて、いつしか、此方より
 も、待ちて、語り慰むるやうになりぬ。

昨夜より雨降りしきりて、今日なほ晴れやらねば、岑雄は此の頃日暮
 らしの友とせる山めぐりも、河原の逍遙もえ叶はず。出湯浴びに出で
 立たむも懶ければ、獨りかき籠りたる居間。對へば自ら見ゆる狭間の
 緑りなす山や、玉ちる箒川の清瀬、をりふし雨に霞みて、薄くなり濃

くなりたなびくけしきの面白さに、まばしは獨り眺め興じたるが、やがて、又徒然に堪へかねるまゝ、醫者のすべて禁じたる讀書が中に、せめてこればかりはと、強て携へ來れる東西の詩集一二冊を取り出で、しばしは餘念なき岑雄、例の丸の門べに呼べる聲も耳に入らねば、「お静坊」かと例の老女が迎へたる聲もきかず。しかも、わが居間に少女の訪れたるをも知らず。

少女は、うち見るより、いと驚きたるけしきにて、「あな客人は、さるわざしてか。いと悪かるべきものを」と叫ぶ聲に、初めて心づきて、「こはよくこそ來たまへれ」とうち見る岑雄の方を、なほつく／＼とうちまもりて、「さるわざせられては、いと悪るからむ。何にまれ、凝るがもとの病なるを」と、いとまじめなる少女の心づけを、岑雄は「徒らにながむれば、兎角にものみ思はるれば、それよりはと思ひてぞ」

と、軽くいひとけば、「さはいへ、さる業はいと悪るし。昨日今日やよき方と大きくものを、あたら心なきわざし玉ふは、口惜しく思ふなり」といひつゝ、岑雄の讀みかけたる側の書をうちまもり、「あな、客人、おん身も歌を詠み玉ふか」と問ふ少女が言葉、おん身もの一言、いと強う響きてきこえぬ。

「さては、わが身も歌をよみたまひてか」と、岑雄が問ひ返せば、「いかで、妾に、妾に歌などの能く詠まるべきかは」と、とみにうち消したるが、何を思ひ出でけむ、言葉は途絶えて、いたく思ひ沈みたるけしき。何とは知らねと、強てさからふべきにあらねば、「さらば止めてむ、わざみが心に從ひて」とて、岑雄は微笑うて、書取り納むる折りから、老女も來りて、「今日は此の子の母の忌日とて、手づくりの栗餅、都の風味には似ざらめど、供養の爲めなれば召しませ」とすゝむる

詞に、慮らずも出でたる母が名。少女は慌てたる氣色にて、聲高く「あな、老婆御、さるをかしき物を置きたまへ」とて、よそに云ひ紛らさむとするを、よしありげなる少女が境遇、何時かは聴き知らむ便りを、此の頃は一向に心に待ち構へたる岑雄は、よき折りと思へばや、詞軽く、「こは、さても、珍らしき。腦を病みたまひてときゝたる、その母上にてか」と問ふに、少女は、いと困うじたるけしきにて、ものもえいはず。「隠したまふべきことにもあらぬを」と、なほ笑み傾ぶきて、うち見やれど、少女は、答へなく、恨めしげに老女の方を見つむる眼は、うるみてかどさへ見ゆ。

岑雄は、わが書く所、眞にあたれり。直ならぬ後妻の黒髪に、意氣地なくつなぎつけられて、共にまゝしく責めつかふ耻かしき父が心なさを、やさしき少女の心から、口さがなき世の人にならぬ笑はれむことの忍ばれぬものから、斯くは母の事さへ包むなめり。それ知られむことを、かくばかり忌むなめりと推し慮れば、さてもかゝるあやしき荆棘が奥、かゝる荒き岩がくれに、世に珍らしき撫子のやさしきを見るものかなと思ひめでられ、少女が身の上のいたはしさは、いよく岑雄の心に染みてぞおぼゆるにつけて、もとより然れどてにはあざれど、假りにも、さばかりのやさしき少女が心の苦しみとなる事を、云ひも興じたる事の、いとあさましく覺ゆれば、自らよそ事に紛らしはたさむと、さりげなきさまにうち笑ひつゝ、餅取りあげて、「こはいと珍らしものにてこそ。おん身が手づくりとさへある床しさよ。岩淵の菓子餅は、東海道中の名物とききたるが、それにも勝りてならむ。げにえもいはぬ味のうるはしさよ。此の返禮には、何をかまゐらすべき」と、少女が方をうち見やりて、からくどうち笑ひ、「めづらしき餅の

返禮なればをかしき物語りやよからむ。おん身がなつかしといはるゝ都わたりのをかしき物語りせむ。今日は休みたまひきとあれば心ゆるやかに聽かれよ。やよ老女御、其方も障ることなくば、共にきゝね」など、頻りにさりげなき方に、つくろひもてなせば、少女も有情に思ひ紛れけむ、いつしか面白氣にて、岑雄が都の物語りに、一日聞き暮らして、なほ名残り惜しげにて歸り行く影を見送りて、「よにもやさしげなる子や」と、岑雄はおぼえず獨言てば、「客人にも見え玉ふか。げに心も容姿もやさしく、さらぬだにいとほしげなる子には侍るを、老婆よ〜となつかしう問ひまつはるものから、もとよりたゞに同じ谷川の流れ、むすぶばかりの縁にはあれど、さながら離れがたき我が子のやうにも、悲しう思はれ侍るにこそ」と、懐かしげに云ひたるが、やがて、忍びかねたるけしきにて、語りきかする少女が身の上。きけ

ば、よく〜あはれむべき身なりけり。

少女が故郷は都のほどり。いかなる住居したる身なりけむ、老女も定かには知らず。明けぬ夜、暮れぬ日の無きを、思ふにまかせぬ事にして、長閑に起臥したるきはなりきとか。されば、少女の母なる人は、歌つくり樂むを、且夕の業のやうにして、これにのみ夜を日に暮らしてありけるが、餘りに思ひ凝りたれば、いつしか腦の病にかゝられしかば、此の鹽原の出湯をたより來て、折〜保養しておはせしが、家を守る人の、斯く留守勝ちになりしより、何時しか、人の皮被たる猫や狐などの、あやしき動物の、寢殿にさへ横行するやうになりぬ。母なる人も、かつ〜は知らざるにはあらぬど、もとなだらかなる氣質なれば、父の愛で玉ふものなれば、強ちに嫉みいふべくもあらずとて、他所にのみ聞きも思ひも捨てゝのみありけるが、少女の父といふ

は、さばかり足らぬ事知らぬ身の、もとより世を我儘に振舞ひ來れるからに、益々心のまゝに止まず、うかれゆきて、今は行末いと空おぼつかなくおぼゆることのみ、多くなりゆけば、母なるは、頻りに兎や角と思ひわつらひたるより、さらでも快からぬ頭の、とみに苦しくさへおぼえ、斯くてのみあらば、いとむつかしく危かればとて、醫者の必ずと勸むるまゝ、心にかゝる事なきにあらぬも、雲時をとて、またも思ひ立ちたる鹽原の出湯路。假染の旅寢とのみ思ひしに、はか／＼しき効驗もなく、心ならずも、日とつみ、月と重さね、年さへ經るに、假寐の起臥、心急ぎのいと静かならず。且は都の空のいよ／＼覺束なく、心にかゝり來て、朝の霞、夕の霧、思ひむすぼるゝ方の、いやまされば、なかく／＼に、病は重りゆくやうなるに、斯くてはと思ひ煩らふに、益々煩らはしくなるばかりなるを、都には、外にのみ聞き

すて、かことばかりの音づれも、絶えてなきも、道理り。家は何時しか、野に山に年經たる妖狐の、わがまゝに住み荒して、人の心ばえしたる者は、皆嫉み逐ひて、はては、何時しか、鹽原の出湯路に病みわづらへる母に、あさましくもあらぬ濡衣を被せて、少女と共に逐ひ出さむずる邪慳、げに喰ひも殺さぬがいぶかしきばかりの振舞ひ、留守の間を頼みおきたる年來の召仕が、涙ながらに尋ね來て、むせび泣きての物語り。母は、さらでも思ひ細りたる玉の緒の、餘りの事の驚きと愁嘆とに、えも怵へず。はかなくも絶え入りたるまゝ、引けど歸らず。呼べど戻らず。「たゞ此の子が」との一言を、二度三度繰り返されしばかりを、名残りにて。少女はやう／＼八歳の秋、今朝の嵐に結びもどめぬ野末の露のはかなさも、昨夕の霜にしをれもふせる山邊の草木のあはれさも、いまだ身にしみておぼゆるきはあらねども、

さばかりやさしき少女なれば、かへらぬ母の亡骸を呼びまどひての歎きは、いふばかりなく、棺にすがり墓にさへ取りつきて、袖にかきくらす涙の雨、空もといろといろに時雨きて、まさる谷川の水音も、心ありげにとよめきぬ。

床りも縁もなき山里人も、くみはかりては、袂ぬらさぬはなきものを、いもせといひ、親子といふ、よくく去り難き都の人は、袖なき心の、飽くまでもつれなくて、振りすてたるまゝ見もかへらず。都より泣きて來れる彼の召仕が、獨りまめやかなる者にて、亡き後の事、身一ツに營みはかり、少女が一向に母をのみ戀ひ慕ひて「せめては今よりはみ墓の在る此處にこそ住みも暮らさばや。都にも何方にも行く心なし。明日よりは薪もこらむ、眞草もからむ、如何ならむいやしき業をしてなりとも、此の山里にてこそ、わが世を送らまほしけれ」と

のみいふに、その召仕も、嵐に霜に、さして頼むべき陰もなく、浮世の原に、よくくさすらへる身なりしを、少女の此の母なる人の情けに救はれて、今日までその暖かなる軒端に有り難きまでの長閑なる春秋を送るを得たる露の命の嬉れしさに、今よりはその有り難き人の形見の撫子の爲めこそ、かけても盡くすべきわが身なり、しかも自からも、げになつかしき人の御墓、朝夕塵をこそ拂はまほしければとて、其のまゝ此の山里に住み留りて、朝には山路の露にぬれ、夕には野邊の嵐にしをれつゝ、あやしき山里の營みにやつれながら、少女をいつき育みたりしが、それも、いつしか、同じ山路の露の伴れと消えゆきてより、いよく覺束なき少女が境遇、今あるは、そのまめやかなりし召仕の夫なるが家なれど、それも、後妻を迎へてより、宿のけしき昔に似ず、軒端の嵐、床の霜、いとつらくのみなりはてぬ。

もとをたゞせば、召仕の端くれが、何時しか、自ら呼びて、父となり、しかも、邪慳の父となり、少女をさながら我が子、しかも、わが繼子の様に呼びにくみ、かゝる賤き業に暇なく追ひ使へど、少女はさばかりやさしき子なり、殊に此の年月一方ならぬ情けありし其の人の志に報いむと思ふものから、あやしき姿、馴れぬ業を、辛しとも苦しとも思はず、斯くは山里にこそやつれはてゝなる栗賣りの少女が身の上。

あたら谷間の落栗の、朽葉が下にうもれゆくこそ、あはれなれ。さる心の母の種なれば、少女も、言葉の道は、深く思ひ染めてなれど、かゝる山がつの今の身に似つかぬ手振りして、なか／＼に、もとのゆかりを尋ねも知られむことを、耻かしく便なく思へば、絶えて色にもけぶりにも出でず。外よそには深く包みてなれど、此の老婆のみには、折よそりふし聞かせも語りもして、反古のはしなどに自ら書きとめて見せ

たるばかりも、今は箱にあまるばかりになりぬ。老婆などは、もとより文字などは、色とも葉とも知りたる身にはあらねども、彼の子のものとおもへば、わけはあらねど、捨てがたくて、年來斯くは納め置きたりとして、取り出したる、美はしくはあらねど、水莖の跡も、いと清うやさしげなる、見るより、その心情はおもひよまれて、あはれにゆかしく、読みもてゆけば、山に、河に、草に、木に、大方は見るものにつき、きくものにつき、亡き母を思ひ悲しみたる言の葉にして、露ならねど、車ならねど、よむ袖の、志とゞにまめりておぼゆるが中に、

ことならば苔にならばやなつかしき

母の御墓の苔にならばや

とばかり思ひこがれたるより、

まくさかる荒野の末を一人りして

行くべきものとおもはざりしを

などながめ歌へるわたりなどは、あどなく幼きが中に、何のあやもなきが中に、なかく、に、限りもあらぬ美はしき愛情の匂ひこぼれて、あはれさ、ゆかしさ、云ふばかりもあらぬに、岑雄は是非にと求めて、その二片を乞ひとりて、歸らむ日の家苞にと、旅荷の底に藏めたるが、それよりは、朝の窓のべに、夕の燈の下に、岑雄が折りくゝの吟詠の度には、毎時二度三度繰りかへされぬことはなかりき。

下の巻

斯くて、少女が商賈の行き歸りの訪れは、日に日に變りては見えねど、迎へ送る岑雄が心は、何時となく何となく變り行きぬ。初めは只有り難き人の親切とのみ起臥に悦びたるばかりの少女の見舞を、何時と

くわが假り寢の窓の朝夕の樂とのみ思ふやうになり。はじめは少女がいかばかりか悲しからむ心の中を思ひやりて、よそながらも語りて慰めむとのみ思へる折りふしの物語りも、今はなかくゝに、そを我が心の慰みと爲すやうになり。初めは唯よそにのみ哀れに悲しとばかり思ひやりたる少女の境遇を、此の頃は、いつしか深く立ち入りて、いかにせば、その境遇より救ひ出すを得んものと、獨りとさまかくさま、寐覺の床におもひ煩らふことも、夜毎のやうになりぬ。

されば、朝に少女の訪れざる日は、何と云ふよしはあらねど、一日面白らかず。さては、少女の歸り遅き夕は、尋ね迎へむといふ心にはあらねど、月もあらぬに何時しか空にあこがれ出で、福波戸あたりまで、獨りそいろありきして、あへば、忽ちにそいろありきは打ち忘れたる如く、何處よりも直ちに伴れ立ちて、急ぎ歸り。あはねば、おなじ道

を歩き歸りして、歸りも打ち忘れたる如く、そいろありきに夜を更す事もあり。「此の闇に何にうかれて」と、靜子が幾度かあやしき問ひたることあれど、岑雄自ら我が心を知らねば、他人に答へむ言葉はなく唯微笑みては伴れ立ち歸るのみ。月の夜もおなじけれど、さりどて、月にうかれてにもあらざらむ。「蓬萊橋畔のさざれを渡る月、袖の澤邊の岩根にやどる影、何處の月の眺めをこそ」と、老婆に問はるゝ事あるも、何時迎も、さらに覺えたる景色はあらず。「如何なる事を思ひたどりて、さては、さばかりの月にも目とまり玉はでか」と笑ふ老婆が言葉に、自らも笑うて、わが心の中に思ひ尋ねれど、何を思ひたどりきといふ事も、更におぼえず。

少女は、それを何と思ひてならむ、歸り遅れて急ぐ夜路、岑雄にあふ度毎に、初めは、毎時、「思ひがけぬ」と驚き、「今宵もそいろありきにてか」など尋ねて、伴れ立ちては、又一向に急ぎたるが、何時しか岑雄に遇へば、遅れたる歸路に更け行く空をも忘れ、宛がら自らもそいろありきするばかりに、徐かに歩み歸へるやうに成りぬ。しかも、反て、あへば頻りに急ぐが如き岑雄の歩みを諫めてしづかに語り伴れたる事さへあり。終には、岑雄にあへば、臆て、走りよりて、「疾く早く歸らむとちもひたるを、彼のうるさき客に妨げられて」と、さながら外にてきけば、岑雄のそいろありきを、我を氣づかひてたづね來れるものと見て、わが歸へり遅きを詫ぶるがごとく聞ゆれば、岑雄は、また、遇へば、嬉しげにて、「いたく遅かりしことよ」と云ひて、伴れ立ちては歸るさまは、いつか、さながら、よそ目には、尋ねたひたる人の如く見えぬ。

少女の歸りの夜に入る事は、何時しか日毎の様に成りぬ。毎時、玉屋

の客に引き留められてなりと云ふ。岑雄がそいろ歩きも、又おなじく夜毎のやうに成りしをかしさ。一日、さうざうしくかき暮らしたる空の、夕暮より雨に成りて、いともの淋しきに、少女はまた歸へり來たらず。今朝立ち寄りし時には、「今日は只玉屋の客まで、父が誂へられたる物を届くるのみ。今より一走り疾く行きて早く歸へりこむ」とて、嬉しげに老婆にも告げて、急ぎ出で行きたるものを、夏の長き日の暮れはつる迄も、なほ歸り來ず。折り／＼山風の亂れ來て、吹き散らす松の滴り、岩走る水のしぶきさへ添へて、甚しとどに降りしきる雨の山道を、岑雄が逍遙は、今宵も變はらず。何時か、福波戸邊りまで、さすがに志したる所ありげに、足早に行きけるが、福波戸の町を二度三度行きかへりしたるのみにて、又空しく引き返しぬ。歸り路は、いと徐かになりて、折／＼は立ち留りて、高く低く岩根にしらぶる谷

川の音、はら／＼とこぼれかゝる松の琴柱の雨の響など、聽き考ふるが如く、漸くに門前まで歸り來れる折りしも、頻りに叫ぶ犬の聲、彼が重げなる足は、俄かに軽く、「あな丸か丸の聲よ」と、覺えず獨語ちして、彼は駈け出せり。

なほけたしましく叫びつゝ、谷の小路より駈け登りたる犬は、岑雄が「丸や丸や」と走りながらに呼びつゝくる聲を、はやくも聞き知りて、疾風の如く飛び來り、岑雄の袖を咬へ、裾を噛み引き、狂へるばかりに鳴き叫びながら、またもと來し谷の細道の方へ向て飛びゆくに、岑雄は「丸や／＼」と呼びかへしつゝ、後を追へば、犬は幾度か駈けかへりては、岑雄の袖を咬へ引き、また、痛く常ならぬ聲しながらに駈けゆくさま、普通ならぬ氣色なり。岑雄も何となう胸轟き、何時しか夢中になりて、崖路を迂り下り、谷川の架橋を駈け渡りて、犬の駈け

廻りて叫び狂ふ岩根の下に走りよれば、いかにしけむ、岩根にうつぶしたるまゝ、正體なげなる静女の姿、ものもおぼえず抱き上げて、「如何にせし、何處か苦しき、やよ静子」と問ひ「勞れど、はや絶え入りて、何の答へもあらず。岑雄は驚きまどひながらも、幸に近き谷川の水に袖をしたして、少女の面にふりかけ、口にしぼりこみなどして、頻りに呼び立てたれば、静子は僅に見開きて、おぼろなる眼に、つく／＼と打ち守り、「岑雄様か」と一言云ひしのみ。力なげに岑雄の腕にもたれて、ものもえ云はず。岑雄は、なほさま／＼と勞りて、少女が「さまではいと心苦し」と辭むを、「さる心遣ひすべき時にかは」と、かひがひしくも背負ひて歸り、老婆と共に心を盡くし手をつくしての介抱に、一夜まどろみもせず。嬉しさを云はむとするが、響きてえ堪へぬ胸の痛さに、唯打ち臥したるまゝなる少女が、折り／＼自ら固く

合はする両手、苦しさに悶ふるのみとは見えざりけり。

事のもとは明かならねど、急ぎて下る山路の木の根に躓きて、眞逆さまに落ちかゝり、麓の岩根にしたゝかに胸を打ちて氣絶したるものにて、胸はれ痛みて、枕を右に左にかふるばかりも、身を動かす能はず。醫師の教ふるまゝに、絶えず出湯を汲み來りて、老婆とかはる／＼に温めなどするに、痛みは折りふしは輕げにて、枕を力に半ば身を起して、有り難き介抱をよろこびきこゆるほどに成りぬ。父と呼べる人も來りぬ。されど、何事か腹立てるけしきにて、「柔さしき人の心も知らず、片意地なるわざするからぞ」と云ひしのみ。苦しさを如何にと問ふ一言だに、勞る詞はなし。歩めずば車もあり、駕籠もあり、他人の家に何時までか、疾く歸りて、寐もせよ、うなりもせよ」とは、角無きばかりの人鬼。片葉蘆と共に鹽原の七不思議の中に數へざるが、不思

議にこそ。

岑雄は、いかでかゝる邪慳の人の手に渡さでもおもへば、老婆も同じ心ならむ、「少しにても身軀を動かしては悪るしと、今朝も醫者の、くれぐれ注意せられたる程なれば、此のまゝ老婆の家に置き玉へ。他人なればとて、此の可愛き娘に、邪慳の詞だに云ふべきかは。心置なく預けられよ。所詮、いまの此の身軀にては、今日明日籠は負はせらるべきにもあらず。商賣さすべきよしもなからむに、何處の家に臥してあればとて、同じ用なき身軀、此處ならば出湯も近く、斯く常に温めむにも、便りよし。此の可愛き娘の不慮の病を、今より老婆が手しほにかけて、疾くまた籠を肩に山坂を上り下りすべき丈夫なる身軀に取り返してまゐらせむ」と餘りの人の邪慳さに、自ら出づる皮肉の詞。からりと打ち笑ひ、「病は介抱にあれば是非に」とて、少女を預ることに成りぬ。

岑雄が胸を温めやる時は、老婆は撫で擦り、老婆が温めやる間は、岑雄が撫で擦りて、右より左より、やさしき心を合せて、晝夜間なき介抱。人の誠心の力は、いみじきものなり。醫師も一度はむづかしきものに云ひたる痛みの、日に日に、柔和く成り行きて、折りふしは快げにて、一時、半時は語りもしきしもして、全く痛みは忘れたるもの、如し。少女が書物を好むと云ふ事より。岑雄は面白き小説にてもと、ふと携へ來れるを思ひ出し、旅荷の鞆取り出で、かい探る紛れに、いつぞや老婆より貰ひ受けたる少女が短冊、深く押し隠したるを、打ち忘れて取り出だしたり。「夫れは」とばかり目とむる少女が眼に心付きて、あなや便なき事しつると驚きまどへど、餘りにあらはにて、今更に取り隠さむよしもなし。

さらぬだに病める少女が、如何ばかりか思ひ煩らひ、いかに心や痛めむと思ふに、岑雄は心苦しうて、覺えず打ちながむれば、少女は平生に似ず、ほゝとうち笑みて、「耻かしや、岑雄さま、老婆がそれ見せまゐらせてか。拙きものを耻かしき。亡き母が好みしものから、妾も門前の小僧にて」と、またほゝと笑みたるが、いと眞面目になりて、「岑雄様、免し玉ひてよ、今日まで隠しまるせたるを、母亡くなりてよ、妾もありとは覺えず。心は母を離れず添へたれば、此處なるは唯我殼のみ。風にもあたらむ、雨にもあたらむ、母が朽ちたる野末に同じく塵とならむ時を待つのみ此の殼、他人につぐべき身にもあらねば、他人に知られむは用なき身、隠すと云ふには侍らねど、告げのみ、今日迄は來りしにこそ。今は何をか隠すべき。免し玉ひて」と、片手を杖に、半ば床の上に起き直れる少女の詞に、胸撫でおろしたる

岑雄、「さ云はるれば、我も隠しまるせじ。御身の上は、大方老婆より聽きて知れり。さばかり邪慳なる人の手に掛りて、苦しき業し玉ふ今の御身、さこそ悲しき朝夕、苦しき起臥をせられてならぬ。さてもかばかり柔しき御身が」と、岑雄が詞は、何時かかき曇れり。「もとより塵となるを待つ間の我殼、風雨の苦患は厭ひはせず、水火の邪慳も露ばかり恐れはせねど、唯苦しきは、かゝる賤しき營みを爲すものから、此の心までを賤しき賣物のやうに見らるゝが口惜し」とて深き歎息に、談話は途絶えたるが、何時しか胸の痛み出でたるけしき。「さまでにあらぬば」とて辭退するを、強てさしよりて、かいさする岑雄の、さすが他所を見詰めたる横顔を、少女は、うるむかど見る眼もと、嬉しげにうちまもりたるが、何時か、すや／＼と寝入りぬ。岑雄が今まで外向けたる顔は、何時か、少女が方配のみむかひぬ。

數ふれば、七日の日數、四度をさへ重ねたる少女が病の床。一言だにも痛みを如何にと問ひ勞る事なき人鬼の父が、何を氣遣ひてか、流石に折りふし訪れぬ。毎時、玉屋の御客よりの見舞物とて、梨よ氷よ乾菓子よと、品をかへては持ち來りぬ。されど、少女は、それ等を見むともせず。「さる人よりかゝる物を受くべき由緒もあらず、且つは、露ばかりもさるものほしからねば、疾く持ち歸りて」とて、必ず押し返して受けず。強て置きて去ぬる時は、「見るだに胸悪ければ」とて、裏なる箒川に、其の儘打ち棄てさせつ。「何故に、さまで」と老婆も岑雄もいぶかりしに、「もとより其の梨と菓子を腐れりと云ふにはあらねど、それ贈れる志の汚きを思へば、其の物も汚く忌まはしきにこそ。初めて商賣ひに行きける時より、何となういやらしげなる客とは覺えたれど、さまで汚きとは知らずして、怪我したる日も、のう老婆御、告げまる

九三三 賣 栗

らせる如く、誂物届けて直に立ち歸らむとしたるに、是非須卷の湯瀧に案内せよ、父御にもつけて許容うけてあれば、歸へり遅くなればとて、大事なし、是非にとて乞はるゝまゝ、伴れ立ちたるに、伴には宿の女子衆も二人三人りあるに、妾にこそとて酌させての一日の遊興。きゝ捨て難き詞も、見許るし難き振舞ひも、常に出入る宿の爲めもあり、忍べる程は忍びてと思ひてあれば、何時か、伴の女子衆は席を出でたるまゝ、久しく歸らず。何となう心元なく思へば、宿の者を呼ばむとするに、何としけむ、なほ聲は下の座敷に聞ゆれど、一人も出で來らず。いよいよしどけなく亂りがはしき席の様子、今は堪へずなりて何處より如何にして宿を出でけむ、唯夢心地にて山路を走り下りての此の怪我。恩義ある父の命ならば、この髪を切りても賣らむ。この爪をぬきても賣らむ。さは云へ、この心ばかりは、いかでか賣るべ

きものならむ。さるを、猶かゝる梨や菓子や、さる物にてわが心を
買はむとするかと思へば、見るだに胸悪るきにこそ。老婆御よ、岑雄
様、さは侍らずや」とつぐる少女の道理。「いつそ、さる汚き物は、犬
に喰はすべし」と罵り、丸を呼び立てたる岑雄の聲は、烈しく震へた
り。

* * * * *

少女の病床につもる日數と共に、二人りの間は、いよ／＼睦むさを添
へゆきぬ。一つ机の書に顔を合せて、長き一日讀みくらす事あれば、
同じ席に端居して、短夜の月影の消えゆくを知らず、物語りする事あ
り。少女の胸の痛みは日と共に去り行きて、今は老婆に助けられて、
近き出湯浴びに行くべきほどになりしが、其の僅の留守をさへ、岑雄
は立ちつ居つ、心落ち着かぬげに見ゆれば、少女も、岑雄が朝夕の出

湯浴び、定まれる間をだに、待ちわびしげにて、「丸や丸や、岑雄さま
を見て來よ」と、門なる犬を呼び立つること常なり。一日語り暮した
る夕、「静子よ、東京へ行き給はずや」と岑雄の問へる事ありしが、「東
京へか」と問ひ返へしたるのみにて、行くとも行かぬとも、静子の答
へはなかりき。一夜語りあかしたる朝、「岑雄様、何時東京へ歸り玉
ふ」と静子の問へる事ありしが、「さればなり、腦もはや快き方に成り
たれど」と云ひしのみにて、岑雄も何時頃歸らむと云ふ明かなる答へ
は無かりけるをかしさ。さても、此の山里に埋れむとのみ思ひつめたる
静子なるに。腦のなやみを養はむばかりに來れる岑雄なるに。

静子が立居も自由に成りし頃より、父なる人鬼の訪れは、日毎のや
うに成り、今はとて疾く宿に歸るべきよしを云ふ。静子は、其の訪る
ゝ聲を聞くごとに、晴れたる眉の、懸て曇りて、俄に打ちしめりたる

けしきに變りぬ。老婆は如何に思ひてならむ、少女の答へぬ先に、何時も「醫者のまだ許容なければ」とて斷りかへせば、岑雄は、今まで思ひながめたる目に、やがてにこやかなる笑みを含めて、心地よげに成りて見返る事、常なり。一日何時になく音なふ聲もやさしげに訪れたる人鬼の父、「今日は少女の亡き母が七年の忌日にあたれば、心ばかりの追善の用意もしたり、静子が一本の香華は、百萬の供養に優りて、亡者もうれしからめば、今日は是非に歸るべし。歩行は難義と思ひたれば、駕籠をも頼みて來れり」とての迎へ。數ふれば、實にその年に當れり。静子はもとより今日を忌日とは、兼てより心付きたれど、その年とも知らざりし心の怠りを耻ぢつゝ、さらばとて、老婆にも岑雄にも一方ならぬ介抱の恩を、涙ながらに悦びきこえ、

明日はまた行來に訪はむ宿なりと

おもへど惜しき今日の別れ路

など書きとめて歸りぬ。

岑雄は、立ちてはながめ、居てはながめ、さては静子の埒なく詠みすてたる歌の反古を、讀みちらし取りあつめなどしたるが、ふと傍の伊勢物語を取り上げぬ、つれづれの慰みにとて、鞆の底より尋ね出で、讀みきかせたるより、静子がいと悦びて、其の後、日に一度は、必ず自ら繰り返し讀みたる書なりき岑雄は讀むともなく披きゆけば、

君によりおもひならひぬ世の中の

人はこれをや戀ひといふらむ

といふ歌の上に、いつ書き添へけむ、静子の手にて、

今は山里にすみて、栗賣る少女ありけり。その女、人のもてる

伊勢物語をよみて、かへすとて、この歌の上に、かくなむ添へて、その人に返しける。

思ひきや見ぬ世の人に今日のわが

おもひをはやく云はれけむとは

人はさこそなめとや思ひとがめけむと書けり。書もてる岑雄の手は、いたく震ひ、見つめたる目元は、早く薄紅みに匂ふと見えしが、やがて、にこやかなる笑みをこぼしぬ。ほゝ笑みながら繰り返し／＼打ち守りたるが、やがて、其の末に何やらむ書き添へんとせし折りから、門に聞ゆる丸の聲。筆うち捨て、岑雅は走り出でたるが、空しく犬のみにて、その人は見えず。「丸のみか」と甲斐なげに云ひたるが、また「丸や／＼」と呼びながら駆け入りて、急ぎ書きながしたる一片の文、人知れぬやう小やかに丸の頸輪に結びつけ、「これ静子さまに届けてよ」

と、額を撫づれば、犬は如何に悟りけむ、おとなしげに垂れたる首を振りあげて、其の儘走り去りたり。

晝より雲のゆき、静かならず、何方の山よりとも定めなく吹き下す風に、折ふし雨をもまじへて物騒がしき空の、夕つ方より、いよ／＼すさまじくなり、さらぬだに今宵は淋しき岑雄の心、消えゆく計りに覺ゆれば、宵より袈打ちかつぎて枕につきたるに、今宵は去り難き都の空、母が上の戀しき思ひの外に、新に忘れ難き思ひさへ添へたれば、いかで安く寐らるべきやうあるべき。夜半過ぐるまでも、露まどろみもせず。空はいよ／＼荒れまさり、山河も轟く風雨の響に、雷鳴さへ加はりて、幾度か天も裂け地も頽れむずると見るに、斯くて此の世の終るか、と、氣も心もいよ／＼消えかへりてあれば、暫時吹き休む風雨の間に、遠くさこそ初めたる犬の聲は、幽かなれど、覺えある丸に似たり。

「あな丸の聲よ」と思ふに、今迄は生きてる心地もせざりし計りの岑雄が、がばと起き上りぬ。「此の嵐の中を何故に」といぶかりて、立ち寄る戸口、犬は仆れしかと覺ゆる計り音して走り寄り、三聲一聲高く呼びつけぬ。岑雄は「丸か丸か」と呼びて、裂けよ破れよと狂ひかゝる風雨を事どもせず雨戸を引き開くれば、丸は椽に飛び上りて、頻りに頸をのばして、岑雄の手に擦りつくれば、もしやと思ひて打ち見れば、頸輪にさゝやかなる文を結びつけたり。わが結べるのかと見れば、左にあらず。

取り急ぎ候まゝ丸して申し遣し、私事口惜しくも汚き人々の阱に落ち候て申し上ぐるも耻かしき身軀と相成り申候今は存命へ候ども所詮御身にあひ奉るべき身軀にも候はず唯永くかゝる耻かしめ見むのみに候へば只今密に思ひ立ちて亡母の墓畔の露と消え

申し候

世にもうれしきおん返り事未だよくも見果てぬ程にて誠に御名残り惜しくは候へどもその御文を携へまゐりてそれをこそよみぢの思ひ出でどのみ存候なれ申すまでには候はねど腦を御勞はり遊ばし百年もやすらかに御暮らし遊ばされむやう念じ上げ

し

し づより

みねをさま まゐる

あなやと一聲、岑雄は寢衣のまゝにて躍り出で、「丸や來れ」と呼ばりて、なほも頻りに摧けよ破れよとのみ荒ぶる風雨の中に駈け出でたるが、天地をつゝむ闇の中に、姿はかき消えて、鳴き伴れたる丸の聲のみ、しばしは高く低くきこえぬ。

その夜より、岑雄も見えずなりぬ。栗賣りありくやさしき静子の姿は、また鹽原の山路にも谷路にも見ゆる事なかりき。夫れより三年二年、年毎に必ずその古町の老婆の家を宿として、出湯浴びに夏を暮らす若き夫婦ありけり。此の夏も、また。

美文 韻文
暗香疎影終

明治三十四年六月十五日印刷
明治三十四年六月十八日發行

定價金貳拾五錢

著 者 鹽 井 正 男

發 行 者 大 橋 新 太 郎

東京市日本橋區本町三丁目八番地

印 刷 者 石 川 金 太 郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印 刷 所 株 式 會 社 秀 英 舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地



發 兌 元

東京市日本橋區本町三丁目 博 文 館

博文館發兌袖珍本書目

文學士笹川臨風君著述	文學士笹川臨風君著述	文學士大町桂月君著述	文學士大町桂月君著述	文學士大町桂月君著述	文學士大町桂月君著述	文學士大町桂月君著述
●雨	●元	●黃	●花	●大	●一	●一
絲	祿	菊	紅	絃	蓑	笠
風	時	白	葉	小	一	一
片	勢	菊	葉	絃	一	一
全壹冊洋裝美本	全壹冊洋裝美本	全壹冊洋裝美本	全壹冊洋裝美本	全壹冊洋裝美本	全壹冊洋裝美本	全壹冊洋裝美本
紙數三百餘頁	紙數三百餘頁	紙數四百餘頁	紙數四百二十頁	紙數四百餘頁	紙數三百餘頁	紙數三百餘頁
正價金廿五	正價金廿五	正價金廿五	正價金三十	正價金廿五	正價金三十	正價金三十
郵稅金四	郵稅金四	郵稅金六	郵稅金六	郵稅金六	郵稅金六	郵稅金六
錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

大橋乙羽君著述

●千	●續	●耶	●初	●風	●累	●若
山	千	馬	子	月	卵	菜
萬	山	馬	子	月	之	菜
水	萬	溪	集	集	東	籠
全壹冊洋裝美本	全壹冊洋裝美本	全壹冊洋裝美本	全壹冊洋裝美本	全壹冊洋裝美本	全壹冊洋裝美本	全壹冊洋裝美本
紙數七百餘頁	紙數七百餘頁	寫真銅版五十八	紙數七百餘頁	紙數三百二十頁	紙數二百餘頁	紙數三百二十頁
正價金五拾	正價金五拾	正價金四拾	正價金四拾	正價金卅五	正價金廿八	正價金廿八
郵稅金拾	郵稅金拾	郵稅金四	郵稅金八	郵稅金六	郵稅金六	郵稅金六
錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

同 ● 藤侯實

實

歷

全壹冊洋裝美本
紙數二百餘頁

正價金三十拾錢
郵稅金六

同 ● 名流談

談

海

全壹冊洋裝美本
紙數二百餘頁

正價金三十拾錢
郵稅金六

● 時代管

管

見

全壹冊洋裝美本
紙數五百餘頁

正價金三十拾錢
郵稅金六

● 霓裳歌

歌

話

全壹冊洋裝美本
紙數三百餘頁

正價金三十拾錢
郵稅金六

● 天地有情

地

情

全壹冊洋裝美本
紙數二百餘頁

正價金三十拾錢
郵稅金四

● 戀星

戀

見

全壹冊洋裝美本
紙數四百餘頁

正價金三十拾錢
郵稅金六

● 星

星

見

全壹冊洋裝美本
紙數六百八十頁

正價金五十拾錢
郵稅金八

江見水蔭君著述 ● 短篇小說 避暑之友

暑之友

友

全壹冊洋裝美本
紙數五百餘頁

正價金三十拾錢
郵稅金六

同 ● 鐵道瀛車の友

車の友

友

全壹冊洋裝美本
紙數四百餘頁

正價金三十拾錢
郵稅金六

同 ● 短篇小說 月と梅

月と梅

梅

全壹冊洋裝美本
紙數三百餘頁

正價金三十拾錢
郵稅金六

大和田建樹君著述 ● 軍事小說 突貫花

突貫花

花

全壹冊洋裝美本
紙數四百餘頁

正價金三十拾錢
郵稅金六

同 ● 韻文 雪山月

雪山月

月

全壹冊洋裝美本
紙數六百餘頁

正價金四十拾錢
郵稅金六

同 ● 韻文 深山

深山

山

全壹冊洋裝美本
紙數六百餘頁

正價金四十拾錢
郵稅金六

同 ● 謠曲文粹

謠曲文粹

粹

全壹冊洋裝美本
紙數五百餘頁

正價金三十拾錢
郵稅金六

大和田建樹君著述

新體詩學

全壹冊洋裝美本
紙數二百二十頁
正價金拾五錢
郵稅金四錢

新撰假名遣活法

全壹冊洋裝美本
紙數二百餘頁
正價金拾五錢
郵稅金四錢

日本小辭典

全壹冊洋裝美本
紙數千八百卅頁
正價金七拾五錢
郵稅金八錢

袖珍實用作文寶典

全壹冊洋裝美本
紙數千六百餘頁
正價金六拾五錢
郵稅金六錢

五十家訪問錄

全壹冊洋裝美本
紙數四百餘頁
正價金四拾錢
郵稅金六錢

笑

全壹冊洋裝美本
紙數五百餘頁
正價金四拾錢
郵稅金六錢

女波男波

全壹冊洋裝美本
紙數三百餘頁
正價金四拾錢
郵稅金六錢

田山花袋君著述

南船北馬

全壹冊洋裝美本
紙數四百餘頁
正價金四拾錢
郵稅金六錢

北京籠城

全壹冊洋裝美本
紙數三百餘頁
正價金四拾錢
郵稅金四錢

魔法醫者

全壹冊洋裝美本
紙數三百餘頁
正價金四拾錢
郵稅金四錢

山陰麒麟

全壹冊洋裝美本
紙數四百餘頁
正價金四拾錢
郵稅金四錢

航海

全壹冊洋裝美本
紙數三百餘頁
正價金四拾錢
郵稅金四錢

寶盆

全壹冊洋裝美本
紙數四百餘頁
正價金三拾錢
郵稅金六錢

旅硯

全壹冊洋裝美本
紙數六百餘頁
正價金四拾五錢
郵稅金六錢

饗庭篁村君著

聚

饗庭篁村君著述

初

櫻井鷗村君著述

山陰

福地櫻痴君著述

同

同

同

水田榮雄君著述

齋藤綠雨君著述

●わす

貝

全壹冊洋裝美本
紙數四百餘頁

正價金三拾
郵税金六錢

齋藤綠雨君著述

●あ

酒

全壹冊洋裝美本
紙數三百餘頁

正價金廿五
郵税金六錢

國府犀東君著述

●龍吹

鶴語

全壹冊洋裝美本
數紙三百八十四餘頁

正價金廿五
郵税金四錢

内田不知庵君著述

●文藝

小品

全壹冊洋裝美本
紙數五百餘頁

正價金卅五
郵税金六錢

鶯亭金升君著述

●新撰福

全壹冊洋裝美本
紙數四百餘頁

正價金三拾
郵税金六錢

同

●都々逸

一千題

全壹冊洋裝
紙數六百餘頁

正價金卅五
郵税金六錢

鳥谷部春汀君著述

●明治人物評論

全壹冊洋裝
紙數四百餘頁

正價金廿五
郵税金六錢

鳥谷部春汀君著述

●續明治人物評論

全壹冊洋裝
總ク口一ス

正價金三拾
郵税金六錢

千河岸貫一君著述

●近世百傑傳

全壹冊洋裝
紙數六百餘頁

正價金五拾
郵税金八錢

千河岸貫一君著述

●續近世百傑傳

全壹冊洋裝
紙數五百餘頁

正價金四拾五
郵税金八錢

川崎紫山君著述

●古人今人孰是孰非

小文章

全壹冊洋裝
紙數三百餘頁

正價金廿五
郵税金四錢

岡崎遠光君著述

●風雲月露大珠

警世評論

全壹冊洋裝
紙數四百八十餘頁

正價金卅五
郵税金六錢

末松房泰君著述

●經濟、美術、政治

冠詞例歌集

全壹冊洋裝
紙數三百餘頁

正價金廿五
郵税金六錢

井上敏夫君著述

●國語、漢語、類語

作文錦囊

全壹冊洋裝
紙數五百餘頁

正價金卅五
郵税金六錢

佐々木信綱君著述

●詠歌辭典

全壹冊洋裝 正價金七拾五錢 郵稅金八錢

●竹柏園集 紙數五百餘頁 正價金卅五錢 郵稅金六錢

百束持中君著述

●作文熟語字典

全壹冊洋裝 總クロ一ス 正價金一圓 郵稅金八錢

●田中次郎君著述

●學生立身策

全壹冊洋裝 紙數二百餘頁 正價金拾貳錢 郵稅金四錢

●竹貫直人君著述

●數學遊戲

全壹冊洋裝 紙數四百餘頁 正價金廿五錢 郵稅金四錢

●上司子介君著述

●相撲新書

全壹冊洋裝 紙數二百餘頁 正價金廿五錢 郵稅金六錢

●金澤巖君著述

●通俗治療救急法

全壹冊洋裝 紙數四百餘頁 正價金三拾錢 郵稅金六錢

飯泉規矩君著述

●學術自修法

全壹冊洋裝 紙數百八十餘頁 正價金拾貳錢 郵稅金四錢

星野久成君著述

●讀書法

全壹冊洋裝 紙數百五十餘頁 正價金拾錢 郵稅金四錢

竹貫直次君著述

●應用土木工程

全壹冊洋裝 總クロ一ス 正價金七拾錢 郵稅金四錢

龜井重磨君著述

●實用建築便覽

全壹冊洋裝 總クロ一ス 正價金七拾錢 郵稅金四錢

●實用土木便覽

全壹冊洋裝 總クロ一ス 正價金七拾錢 郵稅金六錢

●山路愛山君著述

●實績土木便覽

全壹冊洋裝 紙數三百餘頁 正價金廿五錢 郵稅金六錢

●慨世高山彦九郎

全壹冊洋裝 紙數三百餘頁 正價金廿五錢 郵稅金六錢

一

鈴木光次郎君著

●明治豪傑譚

全壹冊洋裝
紙數二百餘頁

正價金三拾
郵稅金六錢

鈴木光次郎君著編纂

●明治閨秀美譚

全壹冊洋裝
紙數百五十餘頁

正價金拾
郵稅金六錢

中央新聞記者

●名士の嗜好

全壹冊洋裝
紙數二百餘頁

正價金拾
郵稅金六錢

勢多章之君編

●名家古人の評論

全壹冊洋裝
紙數二百餘頁

正價金拾
郵稅金六錢

谷信次君著

●月の光

全壹冊洋裝
紙數二百七十頁

正價金拾
郵稅金四錢

堀江秀雄君著

●學生必携作文資料

全壹冊洋裝
紙數二百餘頁

正價金拾
郵稅金四錢

叻鹿庵主人著

●溪韻松聲

全壹冊洋裝
紙數二百三十頁

正價金拾
郵稅金六錢

橋本奇策君著

●實用寫眞術

全壹冊洋裝
紙數百二十餘頁

正價金拾
郵稅金四錢

佐伯安君著

●游泳術

全壹冊洋裝
紙數百餘頁

正價金七
郵稅金二錢

水谷不倒君著

●義太夫百番術

全貳冊洋裝
總ク口一ス

正價金拾
郵稅金八錢

高橋宏太郎君著

●航海術

全壹冊洋裝
總ク口一ス

正價金拾
郵稅金四錢

加野十次郎君編纂

●新撰民事訴訟手續

全壹冊洋裝
紙數三百餘頁

正價金拾
郵稅金六錢

北一龜君編纂

●立身現行試驗規則大全

全壹冊洋裝
紙數六百餘頁

正價金拾
郵稅金六錢

島田豐君著

●學生用英和字典

全壹冊洋裝
紙數千三百餘頁

正價金一圓卅
郵稅金拾錢

島田豐君著

●袖珍學生用英和字典

全壹冊洋裝 紙數二千餘頁 正價金一圓五錢 郵稅金拾錢

島田豐君著

●學生用和英字典

全壹冊洋裝 總クロ一ス 正價金一圓八十錢 郵稅金拾錢

島田豐、島田弟九君著

●實用英和作文

全壹冊洋裝 總クロ一ス 正價金三十錢 郵稅金四錢

島田豐、島田弟九君著

●英和應用會話指針

全壹冊洋裝 紙數二百二十頁 正價金三十錢 郵稅金四錢

竹村秋竹君編

●明治俳句

全壹冊洋裝 紙數四百八十餘頁 正價金卅五錢 郵稅金六錢

澁江保君譯

●出世の葉

全壹冊洋裝 紙數二百餘頁 正價金廿五錢 郵稅金六錢

著名文學大家執筆

●東西廿四傑

全壹冊洋裝 紙數六百五十餘頁 正價金五拾錢 郵稅金六錢

著名文學大家執筆

●近世世界十偉人

全壹冊洋裝 紙數六百五十餘頁 正價金五拾錢 郵稅金八錢

望月關馬君三谷徹君著

●育蠶要錄

全壹冊洋裝 總クロ一ス美本 正價金卅五錢 郵稅金六錢

野崎左文君著

●漫遊案内

全壹冊洋裝 增補廿三版 正價金四拾錢 郵稅金八錢

西島良爾君著

●實清國一斑

全壹冊洋裝 總クロ一ス美本 正價金廿五錢 郵稅金六錢

博文館編輯局編纂

●增訂新撰帝國法典

全壹冊洋裝 紙數一千八百頁 正價金七拾五錢 郵稅金拾四錢

博文館編輯局編纂

●帝國六法全書

全壹冊洋裝 改正增補第十版 正價金九拾錢 郵稅金拾四錢

池田一到君著

●今體作文六大秘訣

全壹冊洋裝 紙數三百十餘頁 正價金廿五錢 郵稅金六錢

老鼠堂永機宗匠著

●俳諧自在

全壹冊洋裝 總クロース美本 正價金拾壹圓 郵税金拾四錢

峯是三郎君著

●歐米教育指針

全壹冊洋裝 總クロース美本 正價金卅五錢 郵税金四錢

博文館編輯局編纂

●萬民會計日記

(小)全壹冊洋裝 形金字入美本 正價金四七錢 郵税金四錢

石橋思案君作

●筆紙

全壹冊洋裝 總クロース美本 正價金卅五錢 郵税金八錢

博文館編輯局編纂

●郵便電信規則全書

全壹冊洋裝 紙數四百頁 正價金廿五錢 郵税金六錢

法學士中山文次郎君著

●不動產登記法正解

全壹冊洋裝 正價金三拾錢 郵税金六錢

博文館編輯局編纂

●改正商法

全壹冊洋裝 正價金貳拾錢 郵税金貳拾錢

大和田建樹君著

●新體詩學

全壹冊洋裝 正價金拾五錢 郵税金四錢

海軍大主計竹內十次郎君著

●征海軍軍歌

全壹冊洋裝 正價金三錢 郵税金貳錢

博文館編輯局編纂

●改正小學校令

全一冊洋裝 正價金貳拾錢 郵税金貳錢

嚴谷漣山人川田河山人共譯

●少年乞食王子

全壹冊洋裝 再版 正價金卅五錢 郵税金六錢

小林伯圓君講演

●御前中山大納言

全壹冊洋裝 再版 正價金廿五錢 郵税金四錢

尾上新兵衛君著

●軍事戰塵

全壹冊洋裝 正價金三拾錢 郵税金六錢

榮窓無角君著

●俳諧成美全集

全壹冊洋裝 正價金四拾錢 郵税金八錢

文學士高山林次郎君序文

美文
韻文

現代

創作要訣
女氣質

全壹冊洋裝

正價金廿五錢
郵稅金四錢

全壹冊洋裝

正價金卅五錢
郵稅金六錢

寒澤振作君著

新撰五千字典

全壹冊洋裝

正價金貳拾錢
郵稅金六錢

寸珍百種

全部五拾二冊紙數一冊二百頁
正一冊金拾錢
價一全部五十三冊四圓幸錢郵稅四錢

應用經濟地理

伊勢本一郎君編

雷笑餘聲

橫田香苗 佐成源編
兒島光享 三君編

譚海

全三冊 依田學海君著

水野越前守

角田音吉君著

ウエルリントン

矢部新作君著

俳諧史談

山崎庚午太郎君著

俳諧名家列傳

有耶無耶樓主人著

獨逸文壇六大家列傳

漣山人 霧山人共撰

支那哲學者歐洲巡遊通信

羽化仙人譯

支那哲學者歐洲巡遊通信

羽化仙人譯

●英傑之典型

荻原涓 涯君譯

●三大革。ハ
命巨人一ク

迎雪山 人譯

●西洋事物起原

澁江 保君著

●育兒
必携乳の友

進藤 玄 敬君著

●遊藝起原

原田芳五郎 編

●朝鮮名家詩集

青山好 惠君編

袖珍小説

全部十二冊
正一冊金八錢 ●六冊四拾五錢
價一十二冊八拾錢 ●郵稅貳錢

●彫像師

内田不知庵君譯

●天製絲瓜の水

幸堂得 知君著

●改良脚本小御門

依田學 海君著

●江戸自慢男一疋

須藤南 翠君著

●あま蛙

齋藤綠 雨君著

●密告

塚原澁柿園君著

●腕たし

山田美妙 齋君著

●杜鵑一聲

遲塚麗 水君著

內外遊戯全書

全部拾五冊紙數百五十頁
正一冊金拾貳錢●六冊六拾六錢
價一十二冊一圓廿五錢●郵稅四錢

●端艇競漕 法科大學 遠山 熙君著

●新游泳術 法科大學 稻田 實君著

●ベースボールクリケット 工科大學 津田素彦君著

●射的術及弓術 工科大學 津田素彦君著

●銃獵案內 農科大學 佐野信三郎君著

●庭球術 工科大學 野田圭園君著

●玉突術 法科大學 三宅鐵骨君著

●陸上競走 農科大學 志岐守二君著

●鳥獸狩獵法 農科大學 志岐守二君著

●昆蟲採集 農科大學 安藤謙吉君著

●室內遊戯法 農科大學 志岐守二君著

●漁魚術 滿尾藤次郎君著

●馬術 法科大學 遠山 熙君著

●福引集 農科大學 安藤謙吉君著

●蹴鞠と自轉車 法科大學 三井末彦君著

三浦智之君著

●實用**家事經濟學**

全壹冊洋裝
紙數二百餘頁

正價金貳拾錢
郵稅金四錢

澁江保君著

●**世界格言大全**

全壹冊洋裝
總夕口一ス

正價金五拾錢
郵稅金四錢

棚橋廣君編

●新撰**漢語字引**

全壹冊和裝

正價金廿五錢
郵稅金貳錢

大田淳軒君撰

●新撰**明治字典**

全壹冊和裝

正價金卅五錢
郵稅金四錢

大田淳軒君編

●新撰**歷史字典**

全壹冊和裝

正價金六拾錢
郵稅金八錢

大宮宗司君著

●**日本辭林**

全壹冊洋裝
總夕口一ス

正價金四拾錢
郵稅金八錢

齋木寬直君撰

●**明治文選字引**

全壹冊和裝

正價金廿五錢
郵稅金四錢

初稿